

Title	毛利貞齋編「増續大廣益會玉篇大全」
Sub Title	
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.112- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

毛利貞齋編 「増續大廣益會玉篇大全」

関 場 武

本稿は、毛利貞齋の著作のうち、後世最も流布した単字字書「増續大廣益會玉篇大全」を取り上げ、その諸本についての調査報告を中心に記したものである。はじめに著者毛利貞齋に関する論考と、本書についての簡単な紹介を加えてある。筆者にとって貞齋およびその相当な量にのぼる全著作に関しては、未だ調査の途上にあるゆえ、不明な点も少なくない。したがって、その報告は他日を期したいと考えているが、「増續大廣益會玉篇大全」の諸版については、今日までにその大半を見ることを得たと信ずるので、こゝに一応報告することとした。本稿は、昭和四十九年度の休暇中の研究成果の一部に基づくものである。その礎、研究資金や授業の振り替えその他につき色々御配慮をいたされた皆様、図書調査に際し、御懇切なる御世話をたまわった公私の文庫・図書館およびそのかたがたに、一々芳名は記さないが、深甚の謝意を捧げる次第である。

一、毛利貞齋について

毛利貞齋

名ハ瑚珀、字虚白、貞齋ハ号ナリ、浪花ノ人、京師ニ舌講ス、諸書俚諺抄ヲ著シテ梓行スルニ、皆自ラ筆ス、其敦厚ナルヲ見ツヘシ、著述甚タ富ミテ、業、宇遯庵ト雁行ス

右は南山道人池永秦良編するところの「諸家人物誌」（寛政四年ハ一七九二〇七月刊）上巻に見える、毛利貞齋に関する記述である。同書ではこの後に「著述」として、「四書俚諺鈔」・「同集註俚諺鈔」以下「句双紙首書」・「首書會玉篇」に至る、計三十二点の著作名を列挙している。以後刊行された如何なる人名辞典・各種事典のたぐいを見ても、貞齋に関しては、右の記述をほとど踏襲しているのが普通である。曰く、浪華の人で、京に出て舌耕をし、漢籍の俗解書を多く著わし、ほと同時代に活躍した遯庵宇都宮由的（宝永六年ハ一七〇九〇〇 七十七歳）と並び称される。……こういつた紹介がなされるのが普通である。梅園堂都の錦は、その「元禄大平記」（元禄十五年ハ一七〇二〇三月刊）巻七ノ四「今の学者を指折てみる」の中で、毛利貞齋を、「德行にかまはず、たゞ博文を好、書教に濟る事をもつはらにして、ほまれをもとめ」「あまねく世上に名をよばるゝ」「外題学者」の一人に教えあげている。本当に貞齋は、たゞそれだけの人にしか過ぎなかつたのであろうか。

そもそも筆者が貞齋に関心を持ったのは、後述する「増續大廣益會玉篇大全」の著者としての興味がはじめてであった。そして次に、たまたまその「初學指南抄」を繙いた折、卷之二の「古文後集」に関する注解記事の中に

【真實】……先年出セル評林ニ記セル。六學僧傳并ニ▲遺經閑詩▲佛祖統紀▲宗鏡錄序等、逐一可ニ刪本一

【養視】養準也、此説大ニ誤レリ。先輩如レ此辯セルガ故ニ、愚ガ評林ニモ記セリ、當ニ刪去ニ、凡字書韻書ニ準也ノ註末ニ一覽ニ（種

樹郭橐駝傳)

等という個所が屢々出て来るのを知って、その興味は不動のものとなつたのである。自著中の誤りを堂々と訂正している。——この簡単なようでなかなか出来ないことを一見深くやっている、その態度に心を惹かれたのである。

「初學指南抄」三卷は、貞齋の晩年、享保五年（一七二〇）正月に刊行された（註一）。それは、天明頃発売の「増補歌枕秋の寢覚」後印本に付された定栄堂吉文字屋市兵衛の広告「儒書品目」中に

宋引指南、唐ノ歴代要覽、廿一史大略經原詩文讀法指南ヲ委ク載、經文出所ヲ記、都テ初學ノ為ニ成リヲ集ム早學文ノ原也

と紹介されているが如き内容を有する。そして後に、本書の卷二までと菊池桐江子の「文章備語」、それに「職原記事」・「李巨山詠物詩」を付載して、「補正初學指南抄」と題しても発売されているものである。ところで、「初學指南抄」の目録中に「古文後集評林並二俚諺鈔ノ誤付出處」とあるように、同書卷二には、貞齋が嘗て著わした「古文真實後集合解評林」十卷（延宝七年八一六七九〇刊）と「古文真實後集俚諺鈔」二十卷（宝永四年八一七〇七〇刊 男珊瑚校閱）の、二書の補訂が記されている。而して實際にその本文をながめてみると、前に引用した一節からも覗えるように、とくに、先に刊行された「合解評林」について、その誤りを訂正するところが多

く、
以上引書之全文者、愚先年筆記シ世間流行セル俚諺鈔二十冊ヲ緝テ可ニ一覽、且俚諺鈔ニモ誤レルヲハ改正セリ、初學萬一ノ助
タラバ幸甚

という一文を以て終っている。——このような態度に、市井の学者としての良心を見出したような気がしたのである。尤も、読み進んで行くと

林以正 傳古來無^シ考出人^ニ、況於^レ愚乎、先年出セル評林ニ或人ノ曰詳^ク于神仙通鑑ト彫刻セリ。當^ニ刪去^ス、重ネテ神仙通鑑ヲ考ルニ無^シ之、好事ノ癖者某ヲ欺ケルカ故ナリ。

月出篇 評林 先年刺^ス陳靈公淫^ニ、夏姬^ニ作也ト、如^レ此先輩講ジ來レル故ニ記セリ。今逐一詩經ノ末書ヲ闕^ススルニ、陳君誰ヲ

指スト云フヲ不レ記、當ニ刪去ニ（赤壁賦）

等という個所や、巻一の

子ガ享保第三年ニ刊行ヲ許セル。歴代参考ト号スル五巻ヲ（ヒトイ）緋テ可レ見。若ハ初學ノ一助トナランカ（歴代略次）

子ガ正徳第六ニ改正セル孝經大義詳略大全ト号スル四巻ニ引用スルヲ。初學（ヒトイ）緋イテ。一覽シテ可レ知（孝經）

凡四書ニ附テノ読癖ノ出處考へ異論等ハ。子ガ撰出スル。四書集註俚諺鈔ト題スル五十冊ヲ考へテ知ルベシ。（大學）

子ガ先年（カ）掛物ニシテ。刊行サセタル昭穆遷廟ノ圖ト号スルヲ可レ見（中庸）

という個所も目につく。それゆえ受け取り様によっては、弁解がましいとか、いや、そうではなくて、初学の徒に對しむやみに先輩や他人の説を嚙呑みにすることを戒めているのであるとか、あるいはまた舌耕の徒であるだけに流石商売上手である等と、色々推測することもでき、それほど高潔な士であったとも思えなくなってくるのであるが……。

ところで、前にも述べたように、ふつう、毛利貞齋は、名を瑚珀、字虚白、号貞齋、通称香之丞であると説明され、大よそ三、四十部の著作が彼のものとされている。しかしながら、貞齋に関しては、その生没年時を含めて未だ詳かならぬ点が多い。著作の数もそうである。例えば、中には、香之丞を香之進としたり、あるいは息子の瑚珣（唯軒）と混同して、その「蒙求標題俚諺鈔」（宝永三年八月一七〇六刊）を父貞齋のものとして数えあげたり、逆に貞齋の著作を瑚珣のものとしたりしている場合がある（註一参照）。本稿の性質上、簡単に述べることとするが、手始めに彼の著作を迎ってみると、大体延宝三年から享保の半ば過ぎ頃まで、京都を中心に活動を続けたことが知られる。そして、「貞齋」と号する前に、「玄齋」とも号していたことが判明する。而してその証拠となるのは、次にあげる「孝經大義詳略大全」である。

「孝經大義詳略大全」大本四巻には、正徳六年（一七一六）四月刊の重改本もあるが、その初版は延宝七年（一六七九）五月のことである。而してその延宝七年版に松岡版と錢屋版の二種がある。すなわち一は「延寶七己歳仲夏吉日」の年記の後に「書肆 松岡平兵

「衛繡梓」とあるものであり、一は同所に「書肆 錢屋儀兵衛繡梓」とあるものである。この両者の刊記部分を比較してみるに、後者の「錢屋儀」の三字は入木なることが明白であり、全体の刷りも松岡版の方が良く、松岡版が初版であることを知る。さて、こゝで問題になるのは、その内題である。すなわち、初版と目される松岡版の内題は

孝經大義詳略大全卷之一（卷之三）

洛訥 通客 毛利 玄齋 校輯

孝經大義詳略大全卷之二（卷之四）

洛下 通客 毛利 玄齋 校輯

となっている。まさに天和三年（一六八三）孟春刊のイロハ分け「新增書籍目録」の「こ 儒書」の部に「四 孝經^{（孝）}祥畧^{（祥）}大全^{（全）} 毛利玄齋」とあるそれである。ところが、後印の錢屋版では、当該個所の「洛訥」の「訥」、「玄齋」の「玄」に、各々「下」、「貞」を入木し、全巻その署名部分を「洛下 通客 毛利 貞齋 校輯」の如くに改めてあるのである。軽々に玄齋と貞齋を同一人物と見做すことは危険であるかもしれないが、この場合、玄齋改め貞齋という関係、玄齋から貞齋への改名ということを示している、と見るのが自然であろう。同じ延宝七年五月に刊行された「古文真寶後集合解評林」にも、刊記の「延寶第七^{（未）}稔仲夏吉辰」の年記と書肆名との間にある著作者名の部分が、「洛下 通客」の四文字を残して削られている後印本が存し、改名のあったことをうかづわせているのである。天和三年の「鼈頭助語辭」や貞享二年（一六八五）の「韻鏡秘訣袖中抄」には「貞齋」の署名が無く、また書籍目録類でも、貞享二年刊の「廣益書籍目録大全」以下、みな「孝經大義詳略大全」の作者付を「虚白」又は「毛利虚白」としており、「玄齋」から「貞齋」への改名の時期は定め難いが、元禄元年（一六八八）十一月刊の「陳平六奇考諺解」が、扉に「毛利貞齋諺解」となっている。その時までの改名であることは間違いない。あえて想像を逞しうすれば、易の「元亨利貞」から来ているとも、「韻鏡」名乗字研究の影響による改名かとも考えられる。とすると、あるいは貞享頃のことであろうか。

さて、こゝにもう一つ、「翰墨節用」と題する一本がある。「節用」の名を称するものゝ、本書は、当時すでに相当の流行を見せて

いたイロハ分けの二躰節用集、二行節用集とはちがって、詩文を草する時に用いる事物等の漢語の異名・異称や類語・慣用句、名数その他を、問々解説をまじえながら、ほど天文・時節・地儀・人倫人事その他（本文中には「人物」「交際」とあり）の順に大別して、集めてあるものである（註2）。本文部分九十丁半、片面見出し語五行双註十行から成る本書は、その前見返し子持ち枠内に、大きく「翰墨節用」と書名を出し、その右下に「虚白堂校閲」、左下に「嘯月軒繡梓」とする。そして続く巻頭一丁半には、次のような序文が記されている。

今之學者撰文談藝作賦裁詩曷嘗貧事類故實而獲盡其美乎粵稽往牒若玉海說郭初學記藝文類聚杜氏通典白孔六帖合璧事類諸編旁搜博采雖事已備於類之中而連篇累牘不勝浩瀚也予居恒念欲輯下類書事物中之有別名者萃爲一帙以便童蒙遂校讎數部書授家童而備文談著述之一助云延實乙卯初夏華頂隱士玄齋書

以って本書の性格も知られるわけであるが、この序文を草した「華頂ノ隱士玄齋」とは、「毛利玄齋」すなわち「毛利貞齋」のことではあるまいか。何となれば、すでに「孝經大義詳略大全」に見たように、貞齋はその著に署名して

河東潜夫 毛利虚白（元禄三年刊「故事俚諺繪抄」）

洛滋隠士 毛利貞齋（同五年刊「増續大廣益會玉篇大全」）

華雅隠士 毛利貞齋（同十六年刊「音釋文段批評莊子虞齋口義大成俚諺鈔」 同十七年入宝永元年刊「通俗戰國策」 宝永四

年刊「古文眞實後集俚諺鈔」）

華雅隠儒 毛利貞齋（宝永五年刊「訓蒙助語辭諺解大成」）

京兆隠儒 毛利貞齋虚白（享保二年刊「重訂冠解助語辭」）

神邦洛下隠士 毛利貞齋（同十年刊「増補廣類願體俚諺鈔」）

とすることが多い。すなわち、「翰墨節用」に於ける「華頂ノ隱士玄齋」という著作者名表記は、他書に於けるそれと、まさに軌を一

にするのである。しかも前述の如く、この「翰墨節用」の前見返しには「虚白堂校閱」の文字があり、貞斎の名「虚白」が見えるのである。また本書の内容からしても、貞斎のものとして不都合な点はない。とすると、本書は、貞斎の著作として新たに数え入れるべきではあるまいか。延寶第五丁巳稔（二六七七）仲冬吉辰 京都石橋源兵衛刊の「新編古今事類全書」に

洛下 新進 毛利氏玄齋校點

と「新進」の名を冠せられている玄齋である。延寶三年四月序刊の「翰墨節用」あたりを、彼の活動の始まりに想定しても、無理はないであろう。以上のように玄齋すなわち貞斎とすれば、彼の著作活動は、本書を始めとして享保十年（一七二五）四月刊の「増補廣類願體但諺鈔」に至るまで、約五十年間続いたということになるわけである。

本稿でこれから取り上げる「増續大廣益會玉篇大全」十巻は、その貞斎の名を不動のものとした著作である。因にこの時までに毛利貞斎は、語学関係の書として、「翰墨節用」、「龍頭助語辭」、「韻鏡秘訣袖中抄」、「校正増補訓蒙讀書字義」、「新編類字箋解」、「字韻早鑑大成」などを著わしている。

二、「増續大廣益會玉篇大全」

參小補韻會は字註くはしけれども文字すくなし。字彙はつねに用ゆべきものなれども。又文字の不足多し、たとひ字註は龜くとも。字数をのせ初心のものとめやすき書はなきか。京首書字彙を左に置。右に續字彙補をおかば、文字に事欠まじ。さりながら、貧学にして両部の書をもとめがたければ。頭書漢玉篇こそ、初学の字を引為によろしくなり。毛利貞斎のあつめられし書に、是程はやるは御座なくなり

梅園堂都の錦は、前にも引いた「元禄大平記」の巻六ノ一「日本の風にうつしてぞみる」の冒頭（目録に所謂「字引の事はいかにや〜」の項）で、伏見の夜舟に乗り合わせた京の書林と大坂の本屋に、右の如き問答をさせている。たしかに、そこで言う「頭書漢玉

篇」——すなわち画引に改編した「玉篇（漢玉篇）」に大増訂を加え、「字彙」・「續字彙補」・「小補韻會」を中心とする百数部の書（首巻の引用書目によれば百五部、うち一点国書たる「和名類聚鈔」あり）を以て冠解（頭書）を付した「増續大廣益會玉篇大全」——は、数ある毛利貞斎の著作のうちでも、最大級に流布したものであった（註3）。その盛行ぶりは、後述するように、元禄五年（一六九二）の初刊以来明治も末の四十四年（一九一三）に至るまで、次々と版を重ね、時には、もう字書の用には立ち難いほど版面が磨滅してきてさえ、刷りを重さね売り出されてきたことからも、明らかであろう。それは、玉篇類に対する節用集の一方の雄、駒谷散人榎島昭武編の「和漢音釋書言字考節用集（補増合類大節用集）」十卷十三冊（元禄十一年八一六九八）序 享保二年八一七二七）初刊）の、開板度数・浸透度を、遙かに上回るものなのである。

やゝ時代が下るが、安政三丙辰歲（一八五六）孟秋発刊の三浦茂樹編「新編増補字林玉篇大全」横本一冊の巻末に付された「文海堂（敦賀屋）松村（九兵衛）蔵刻畧書目」は言う。

増續會玉編大全毛利貞斎先生編輯
校本 全部十二冊

此書畫引中最第一ニシテ、原書説文・字彙・廣韻・小補勺會・字貫・品字箋・正字通・字典其余字書ノ中ヨリ據ヲ以テ増益シ、一字毎ニ出所ヲ附シ、字義・音訓・平上去入悉ク註釋シ、有益ナルコト他ニ百倍ス、故ニ博識ノ君子トイヘテ、座右ニシテ頗ル鴻益ノ書ナリ

と。……たしかに本書は鴻益なる書であった。例えば、天保九年（一八三八）頃、秋田藩の藩校明德館に於て、有用の書と認められて開板されたこと、岡山藩や徳山藩・大村藩、宮内省の調度局・侍医寮、諸陵寮・東宮御所御造管局庶務課・皇孫仮御殿、それに外務省や工部省・法制局・太政官記録編輯課・財務課・履歴課、東京裁判所等の備付図書として利用され、また寺社をはじめ堂上家・武家等にも蔵せられる等の、広範囲にわたる蔵弄・利用の跡を思いあわせる時、当時他に適当な字書が無かったという為もあるが、本書が如何に鴻益な書であり、実用的な字引として認識されていたかを、十二分に知ることができるであろう。じつさい、首巻一卷と本文十巻、合わせて半紙本十二冊を通常の形態とする本書は、同時代同類の単字字典に比して、その収載字数・字注の多きを誇ったものゝ如

くであり、それ故に世に迎えられたものと思われる。勿論、一方、その大部・浩瀚なるがゆえ、後世、

字學之書以邦訓鮮其義者、以毛利氏玉篇為備矣、但以卷帙浩瀚、不便於提携、初學或苦之

(明治二十六年七月 博文館刊 淳軒大田才次郎編「新撰明治字典」序)

という批判がなされたり、繙読・携行の便を慮って薄葉刷や袖珍本が刊行されたりもし、またその内容上の誤りに対する

我邦ニ於テ、古ヨリ翻刻及ビ編輯刊行スル所ノ字書、一トシテ其正ヲ得ル者アルヲ見ズ、毛利貞齋ガ編纂セル大廣益會玉篇、鎌

田環齋ガ編輯セル大廣益正字通、山崎美成ガ輯録セル文選字引ヲ始トシテ、玉篇、四聲字林等、誤謬ノ甚シキ、論ヲ待ズ、況ヤ

其他ノ字書及ビ近世坊間ニ於テ刊行スル所ノ字引字類ノ如キニ至テハ、杜撰無稽極レリト謂フベシ

(明治十五年十月 旭昇堂刊 安田義和編「^{高等}論說作文軌範」卷上・作文大意)

というきびしい指摘もあったが……。

ともあれ本書は世に容れられ、明治三十六年(一九〇三)二月刊 重野安繹・三島毅・服部宇之吉監修・三省堂編輯所編纂の「漢和
大字典」を嚆矢とする近代的な漢和字典に、次第に取って代わられて行くまで、木版から鉛版・銅版・石版と、版を重ね、また明治
期に編輯・刊行された他の単字字典に、相当の影響を与えて行くのである(註4)。

註1 享保十四年(一七二九)季冬吉辰 皇都書坊永田調兵衛刊 文照軒柴橋編の「^新書籍目録」には、「初學指南鈔」の作者が「毛

利瑚珣」となっている。しかし実際に「初學指南鈔」の現物にあたってみると、巻之一の内題左下方に「神雉 毛利貞齋述」、扉

左方に「神洛 毛利虛白撰」とあり、本文の記述の仕方から見ても、父の貞齋自身の著作と見て、間違いないようである。毛利

貞齋が講述したもの若しくは草稿の如きものを、息子である瑚珣が編纂し一書として纏めあげたと見ることも可能ではあるが、

現物にこうある以上、貞齋のものとして差しつかえないであろう。但しこの目録では、「易學啓蒙合解評林」や「韻鏡袖中秘傳

鈔」も毛利瑚珣のものとしており、普通貞齋のものとされる「四書集註俚諺鈔」に註して「大論ハ毛利瑚珣 中孟ハ同三省」と

あることや、当該書目の刊行者永田調兵衛すなわち編纂者文昌堂が貞斎の著作も刊行していること等を考え合わせると、瑚珣とするに足る何らかの根拠があるのかもしれない。いづれにしても、当時の書籍目録の性格も考慮したうえで、禅籍や仏書の註解書を何点か著わし延宝や元禄の書目にもその名が見える、おそらくは別人と思われる「虚白」と称する人物の問題と共に、他日述べるつもりである。なお貞斎の著作であることが明らかなる「増續大廣益會玉篇大全」の安永九年版の刊記の左脇に、本書を説明して「毛利貞齋著」としているのも、「初學指南抄」が貞斎のものであるという説の証左たり得よう。因に明和六年（一七六九）十一月刊の「諸家人物志」では、「毛利貞齋 大坂人 古人 姓毛利 名瑚珣 字（マコト）号貞齋」となっており、こゝでも貞斎と瑚珣との混同がうかがわれる。

註2

刊本、小本一冊。「上天——穹——鈞——蒼——大清——圓」等、天に関する異名・別称から始まって、干支や月の異名、「○林平地有（マコト）叢木（マコト）曰（マコト）」、「○隱者（マコト）華陽（マコト）隱居（マコト）江湖散人（マコト）烟波釣徒（マコト）」、「○音信（マコト）音耗（マコト）嘉音（マコト）書（マコト）一（マコト）萬（マコト）不通思（マコト）」などを経て、「○称呼（マコト）状（マコト）名付（マコト）臨（マコト）二書（マコト）也（マコト）閣下三公ナドノ位ニ書字（マコト）座下（マコト）台座（マコト）惣（マコト）貴人ニ用（マコト）之（マコト）館下（マコト）尊前（マコト）足下（マコト）几下（マコト）函丈（マコト）淨几下師（マコト）或（マコト）貴人ニ用（マコト）之（マコト）衣鉢閣下僧用之（マコト）」に終る。部門表記は、前半の部分に於てはつきりしないが、後半は「人物」と「交際」の二つに分け、地位や職業に伴う呼び名や親族の呼称、人と人との交わりや生活の中で生ずる様々な状態や、書翰その他の手だてに関する漢語の類語および用語を集めている。特色としては、普通この種の異名集・類語集・韻書中に見られる草木や鳥獸魚虫に関する語を、全く収録していない点をあげることができる。

註3

元禄五年の「廣益書籍目錄大全」や同十二年の「新板増補書籍目錄」を見ると、「十同（玉篇）畫引韻附毛利虚白作」なる字書と共に、「増續漢頭書漢玉大全」の名が掲載されている。この場合、後者がすなわち「増續大廣益會玉篇大全」を指していると見てよいであろう。但し著作者名は記されていない。それに対し、毛利虚白の名が見える前者「玉篇畫引韻附」十一冊は、延宝三年毛利文八輯刊の「古今書籍題林」や貞享二年の「廣益書籍目錄大全」に、既にその名が掲出されているが、どれを指して言っているのかは未詳である。あるいは寛文三年や天和三年版系統の函引の「大廣益會玉篇」のことを称しているのであろうか。と

くに天和三年版「増補大廣益會玉篇」は、版元の一人が元禄五年版「増續大廣益會玉篇大全」通行本と同じ澤村昌益であり、大いに関係がありそうなのであるが。

註4

例えば、明治十年一月刊 鷗卿橋正淑編の「鼈頭新會玉篇大全」銅版中本十二冊は、新しく付加された序文をのぞいて、他は貞斎の「増續大廣益會玉篇大全」の丸取りに他ならない。「凡例」も、新しい点が多少加わってはいるが、大よそは貞斎の「凡例」の一部を採って、多少やわらかい表現で言っているに過ぎない。版式等よりしておそらく明治五年版に基づいていると思われる、言わば「増續大廣益會玉篇大全」の一異版とでも称すべきものである。

三、諸本

半紙本十二冊

表紙 濃縹色無地紙。豎二十三・二、横十六・七釐。

「増續大廣益會玉篇大全」の諸本は、管見によれば次の如く十七類に分けられる。以下ほとんども刊行年次に順ってその書誌を記すことにするが、紙数の都合上、書型の大略は元禄五年通行本を以って代表させることとし、他は異同のある場合のみこれを記した。

題簽 書名・巻数を記した正題簽と、部首の画数・部首および丁

数を示した脇題簽との、二種類がある。

(正) 子持ち杵付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上方に界線

また繁雑となることを恐れ、一々の字句等に関する異同は、今回省略に従った。また諸本の所在は、特別の場合を除き公開の図書

館・文庫等のものに限って示した。

また繁雑となることを恐れ、一々の字句等に関する異同は、今回省略に従った。また諸本の所在は、特別の場合を除き公開の図書

館・文庫等のものに限って示した。

(脇) ための単杵付矩形白紙。首巻は上方に界線を置き(乳

付)「首巻總目」と右横書きに記し、下方に「凡例／

引用書目／四聲附韻目錄／檢字」という具合にその内

元禄五年版

(A1) 鍵屋善兵衛・澤村昌益版

容を表示する。他の巻は上方を乳付の界線で区切り「一二畫（三畫上八下、四畫上八下、五畫、六畫上八下、七畫、八九畫、自十畫至十七畫）」の部首の画数を右横書きに記し、下方に部首およびその始まりの丁を無界豎三段に記す。第十一冊八九画のみは部首の欄の途中にも「九畫」と記す。部首掲載順序は各行タテに上から下へと移り、丁付は「葉」で示されている。なお終冊の部首四〇五行目「鹿」部と「麻」部との間に「麥」部の表示が脱落している。

凡例 増續大廣益會玉篇大全／凡例

末に「元祿第四 辛未 曆／大呂穀旦 洛遊隱士毛利貞齋

編」とあり

引用書目 増續大廣益會玉篇大全引用書目

内題 増續大廣益會玉篇大全首卷（巻第一 一二畫、巻第二 三

畫、巻第三 下三畫、巻第四 上 四畫、巻第四 下 四畫、巻

第五 五畫、巻第六 上 六畫、巻第六 下 六畫、巻第七 七

畫、巻八 八畫、巻第九 九畫、巻第十 十畫）

尾題 首卷にはナシ。

（巻一）（9才9行目）已上一畫部終」（終丁）一二畫終」

（巻二） 増續大廣益會玉篇大全 三畫上」

（巻三） 巻之三三畫下終」

（巻四上） 四畫上畧」（一行置いて次に）増續大廣益會玉

篇大全巻第四上 四畫」

（巻四下） 已上四畫下畧」（一行置いて次に）増續大廣益

會玉篇大全巻第四下 畧」

（巻五） 五畫終／増續大廣益會玉篇大全巻第五」

（巻六上） 已上六畫上畧／増續大廣益會玉篇大全巻六上」

（巻六下） 六畫下至於此畧」（四分置いて次に）増續大

廣益會玉篇大全巻之六下」

（巻七） 七畫大成」（三行置いて次に）増續大廣益會玉

篇大全七畫終」

（巻八） 八畫大成」（二行置いて次に）増續大廣益會玉

篇大全巻之八」

（巻九） 増續大廣益會玉篇大全巻九／九畫大成」

（巻十） 20ウ2行目）已上十畫大成」（46ウ3行目）

已上十一畫終」（51才3行目）已上十二畫畧」（54

ウ8行目）已上十三畫竟已下十四畫」（56才10

行目）已上十四畫大成」（59才8行目）已上十五畫終

已下十五畫始」（59才8行目）已下十六畫」

(60ウ3行目) 已上十六畫大尾
已下十七畫大尾 (61オ3行目) 右

至十七畫大尾」(六行分の間に刊記を入れ最終
 行に) 増續大廣益會玉篇大全卷十
 大尾」

刊記 卷十終丁(61)オ五行目から九行目にかけて

此書首尾校正毛利番之丞筆著

元祿第五甲大呂中旬

鍵屋善兵衛開板

澤村昌益

とあり。他の文字との釣合から見て、あるいは書肆名の部
 分は入木か。

柱刻

(首卷)

凡例	乙	(二)
書目	三	(四)
韻目	五	
首卷	六	

(九、十一、十二、二十二、二十四)

首卷	十
----	---

	十三
--	----

(十六、二十)

	十七
--	----

(十九)

首卷	二十一
----	-----

(その他の巻) 冠解の部分には無く本文の部分のみに次のよう
 にある。

十	乙
---	---

十	二
---	---

十	三
---	---

右図の如く、上部に巻数を出し、下部に丁付を
 記す。巻数の下、丁付の上には界線が置かれて
 いるが、どちらか片方、あるいは両方の界線の
 見えない丁もある。黒い部分は一丁毎に一つ分
 づつ下になされて行き、十丁目で

十	十
---	---

と丁付のすぐ上まで来るようになってゐる。

匡郭

三周単辺。但し大部分の丁は、その中に、本文部分の枠

丁付 (首巻) 乙、二〇二十四 (巻二) 乙、二〇六十五 (巻

(有界) を組む。豎二十一・五一、横十四・五二。本文枠は豎十六・五、界幅一・四三櫃。

二) 乙、二〇四十八 (巻三) 乙、二〇四十六 (巻四上

分巻

(第一冊 首巻) 凡例、引用書目、四聲附韻字總目錄、檢

乙、二〇五十六 (巻四下) 乙、二〇八十六 (巻五) 乙、

字〔題簽卷分け「首巻」〕(第二冊 巻一) 一二画〔同「巻

二〇七十六 (巻六上) 乙、二〇六十五 (巻六下) 乙、二〇

一七〕(第三冊 巻二) 三画上下〔同「巻二」〕(第四冊 巻三)

五十七 (巻七) 乙、二〇七十九 (巻八) 乙、二〇三十八

三画下〔同「巻三」〕(第五冊 巻四上) 四画上下〔同「巻

(巻九) 乙、二〇二十七 (巻十) 乙、二〇六十一

四〕(第六冊 巻四下) 四画下〔同「巻五」〕(第七冊

丁数 (首巻) 二十三丁半△終丁ウは後見返しに貼付▽ (巻二)

巻五) 五画〔同「巻六」〕(第八冊 巻六上) 六画上下〔同

六十五丁 (巻二) 四十七丁△初丁および終丁は各々前見

「巻七」〕(第九冊 巻六下) 六画下〔同「巻八」〕(第十

返し、後見返しに貼付▽ (巻三) 四十六丁 (巻四上) 五十

冊 巻七) 七画〔同「巻九」〕(第十一冊 巻八 巻九) 八

五丁半△終丁は後見返しに貼付▽ (巻四下) 八十六丁 (巻

画・九画〔同「巻十」〕(第十二冊 巻十) 十画〜十七画

五) 七十五丁半△終丁は後見返しに貼付▽ (巻六上) 六十

〔同「巻十一」〕

五丁 (巻六下) 五十六丁半△終丁は後見返しに貼付▽

備考 本書が元禄版の通行本である。

(巻七) 七十九丁 (巻八) 三十八丁 (巻九) 二十七丁

巻五は、冠解の見出し字の掲出様式が、他巻と異なる。す

△すなわち第十一冊目は合計六十五丁▽ (巻十) 六十丁半

なわち四十二才までは、○^ナ 寶玉陽精之純^ナ という具

行数

本文見出し有界十行、双註あり。冠解は無界二十行。ともに

合に○^ナの型が基本となっているのであるが(九才〜十才

に漢字片仮名まじり。返り点・振り仮名等あり。訓は双註

にかけては○^ナ 二十三才ウは○^ナ、四十二才途中からは、

より更に小さく割って出している場合がある。

は、○^ナもしくは○^ナとなり、さらに七十才からは、^ナ又

は()となるといった具合に、他巻の()とは異なっているのである。

所在 国立国会図書館亀田文庫(改装合四冊 東坊城旧蔵) 書

陵部(徳山藩旧蔵) 東京大学図書館南葵文庫(改装 第

十一冊八九画は安永版後印の改装本による入れ本) 東北

大学図書館狩野文庫 高野山大学図書館(三本 一は持明

院寄託本八若州中山寺正寿院諦之旧蔵) 一は宝城院寄託

本八改装合四冊) もう一本は首巻のみ存 三宝院寄託

(本) 神宮文庫

首巻の一オから二ウにかけて貞斎の署名入りの凡例がある。本書の成り立ちに関連する重要なものであるゆえ、やゝ長くなるが、次に掲載することとする。

増續大廣益會玉篇大全

凡例

一、玉篇之書傳ニ 本朝ニ已來用和字ニ贅ニ其音其訓於其側

其下ニ續レ梓ノ頌行ノ尚矣。予歴年閱レ之。音訓俱不レ正。

料固陋之徒加ニ臆見ニ而惑レ世者也

一、近世音訓仍レ 舊欲便ニ檢閱ニ破ニ舊本部ニ新模ニ梅

氏之字彙例ニ從ニ字畫ニ一件有ニ分ニ之者ニ。又別撮ニ拾

字彙所レ出玉篇不レ連字ニ増ニ加 音訓ニ刊行有ニ流ニ布 世ニ

者上矣

一、分畫玉篇新舊兩編者不レ辨ニ字畫製造之義ニ。謾從レ篇

從レ旁ニ混雜。又畫數多少之失不レ少。且惑レ篇疑レ

旁者ニ七千字余脱ニ落ニ

一、今所ニ撰編ニ者改ニ舊本分畫之差ニ。訂ニ音訓之謬ニ

且本字脱落註釋ニ誤ニ字逐一革レ之者也

一、今所ニ續補ニ字不レ出ニ舊本ニ。而切ニ日用ニ者。又字畫異ニ而

素同者。如ニ佛又作レ仏 經史及釋典中間出庸學難レ解ニ者。

考ニ諸字韻之書ニ連ニ系ニ之。每部畫數ニ末ニ包ニ二 田中ニ

記レ之者可レ知ニ補字ニ矣

一、凡 舊本 註及 冠解 中謂ニ某與レ某同ニ者。又古文籀文

記レ某。又某 俗字 之類。槩 其下ニ不レ贅ニ訓義ニ。搜ニ

與レ某同 字ニ可レ曉レ之。如下也 同レ丘。例 古文 夙。五。籀

一、予所ニ贅 音訓根ニ 舊本 反切註釋。有ニ他音他義之區ニ

者。搜ニ羅 他字韻 書及 經史子集ニ。別 冠ニ 本文

頂ニ。釋ニ其音其義ニ。庶幾 為レ 使 識ニ音異則訓亦

異 兼二韻同而訓異。又從二連綿一義差異也

一、冠解所引書。多用二韻會又字彙。所載其解詳而得二其樞要一也

一、本文下及冠解。每字施二四聲韻字一者爲レ使曉下某字用二某義則爲中其韻上矣

一、冠解所贅。每字下雖レ系二韻字反切二間亦闕レ之纒記二引用書題及字註一者本註韻又反切字同則略レ之

一、冠解雖レ引三字韻書所出註解經史所用證一。至二本文下所註相同者一刊二除之。其餘異義連記之。

一、冠解所引諸書題賦レ長纒記二二字。其詳見下引用書目圈内下斷者上可レ明矣

元祿第四辛未曆

大呂穀旦 洛滋陸士毛利貞齋編一

(A2) 永田調兵衛・林治兵衛版

刊記 卷十終丁オ五行目から九行目にかけて

此書首尾校正毛利番之丞筆著

元祿第五壬申大呂中旬

錦小路新町西へ入町
永田調兵衛
大宮通三條上町
林氏治兵衛 版開

とある。すなわちA1本の刊記の書肆名の個所を、入木により入れかえたものである。

備考 A1本の後刷り本である。刷りはA1本に比べて相当に劣り、字書としての用をなさぬほど版面の磨滅している個所が多い。

所在 山梨県立図書館徴典館文庫(首卷欠 十一冊)

(A3) 無刊記本

大本十二冊

表紙 縹色無地紙。縦二十八・八、横十九・三糎。

刊記 無し。当該個所は空白のまゝになっている。

備考 本書には刊記が無いが、元祿版の特色を備えている。例え

ば元祿版には

伏カカカコシコ扶コ扶コ字 (巻一—15オ)

等と未刻のまゝ黒く、言わばゲタを履いた様な状態になっている個所が七ヶ所あるが、本書にもそれが存する。また

字画や匡郭の欠損箇所等も、殆どA1本と一致する。すなわちA1本と同一版木を使用していることは間違いないのであるが、刷りがその元禄版通行本たるA1本と比べて甲乙つけ難い状態にあり、俄にその先後は決め難い。前にも記した如く、A1本の刊記の書肆名は入木によるものかと思われる。その点から見て、あるいは無刊記の本の方が初版に近いのではあるまいかとも想像されるが、この形態の本を現在のところ僅か一本しか寓目していないので、断定は差し控えておくこととする。

所在 書陵部

享保二十年版

(B1) 浪華五書肆版

半紙本十二冊 大本もあり。

表紙 縹色無地紙。

題籤 様式は元禄版に同じなれど、異版。終冊の脇題籤四行目か

ら五行目にかけての、「鹿」部と「麻」部との間に「麥」部が脱落しているという誤りは、そのまま踏襲している。

内題・尾題等 元禄版に同じ。

尾題のうち、巻七の「七畫」とあるべき箇所が「七畫」となっている点も、そのまま踏襲している。

刊記

巻十終丁オ、尾題には含まれた五行目に「此書首尾校正毛利番之丞筆著」とあり、同ウに

享保二十歳乙卯初冬吉日

大野木市兵衛

松村 九兵衛

石原 茂兵衛

澁川清右衛門

鳥飼 市兵衛

とある。

備考

本書は元禄版を被せ彫りに近い方法で覆刻したものである。柱刻なども、ほど似せてある。巻五の冠解の出し方も殆ど踏襲している。なお、A3本のところで紹介した元禄版に於ける未刻の箇所は、本書では四ヶ所に減っている。

また、本の大きさとしては半紙本のものが普通であるが、元禄版A3本と同じ様な大本もある。勿論これは天地・左右の余白が多いということの意味し、版面の大きさ等に変わりがあるわけではない。各冊はじめに遊び紙一丁宛を付

す。

所在 書陵部（東宮御所御造管局庶務課旧蔵） 岡山大学図書館

池田文庫（二部）

(B2) 浪華六書肆版(イ)

表紙 濃緑色無地紙

題簽 B1本に同じ。刷り悪い。

刊記 卷十終丁才はB1本に同じ。終丁ウは新たに版をおこして

享保二十歳乙卯初冬吉日

大野木市兵衛

松村 九兵衛

石原 茂兵衛

浪華書肆

滋川清右衛門

同 與市

鳥飼 市兵衛

とある。すなわちB1本の五書肆に渋川與市が一名加わっている。

備考 刷りはB1本より劣る。

所在 慶応義塾大学国文学研究室 高野山大学図書館 前田育徳

会尊経閣文庫（改装）

(B3) 浪華六書肆版(ロ)

表紙 縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し

題簽 正・脇とも刷りが悪い。

(正)

子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上部を界線（乳付）で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」

と三行に分けて角書きをし、下方に「増續大廣益會玉

篇大全」と書名を大きく出し、その真下に「子」

「亥」までの十二支を小さく記して、各冊の順序を示

し、その左脇に「首巻」、「一二畫」〜「八九畫」、

「百十畫」〜「百十七畫」という具合に記して、収録されている部首

の画数を示す。

(脇)

子持ち枠付矩形白紙。上部を横界線（乳付・子持ち）で区切り、部首の画数（首巻は「首巻總目」とあり）

を右横書きに記す。下方は十行三段（首巻は十行一段）

に界線で区切り、部首および丁数（首巻は内容標目の

み）を記す。部首掲載順序は各段右端が始まりで、各

々左方に移って行く。丁付は「葉」。なお終巻の「麥」

部の表示は正しく入っている。

刊記 B2本に同じ。

備考 刷り相当に悪く、字書の用に立ち難い箇所もある。

所在 東京大学図書館(東京医科大学精神病学教室旧蔵)

(B4) 定栄堂吉文字屋市兵衛発賣本

表紙 薄緑色地紙に雷菱・唐草模様空押し

題簽 B3本に同じ。

刊記 B2・B3本に同じ。

備考 本書には、次に記すように、大坂心齋橋南四町目 定栄堂

吉文字屋市兵衛——すなわち本書の版元の一人である鳥飼市兵衛——の蔵版目録が、見返し等十六ヶ所に互って付されておき、享保二十年六書肆版、それも表紙・題簽の形状よりしておそらくB3本の、後印本であることを知る。

蔵版目録は、第二冊前見返し「筆道書品目」十八点、第四冊前見返し「詩文書品」十三点、同後見返し「儒書書品目」十四点、第五冊前見返し「儒書品目」十一點、第八冊前見返し「石刻目録」二十一點、第十二冊後見返し「字書品目」七点等となっている。而してその發賣時期は定か

はないが、例えば、第十冊の後見返しにある四点の書物の広告のうち、「改正道中行程細見記」全一冊の解説中に、「右ノ書天明年中ニ板行スレドモ、國郡相分リガタキ故、此度一國ツ、ニ色ヲカヘ彩色仕候、其外重宝ノ事品々増加へ候、寛政七年ノ新板ト御タヅネ可被下候」とあり、少くとも寛政七年(一七九五)以降のものであることがわかる。「寛政ノ校正増補ニテ御坐候」とある「刪補囊外療秘録」が、「享保 大阪出版書籍目録」によれば寛政七年六月の許可であり、第十一冊前見返しの「經學拔錦國字解」が、寛政七年十二月の申出であるのも、それを裏付けよう。ところが、さらに見て行くと、第十一冊の後見返しにある広告の中に「日本月令箋」がある。これは前出の「享保 大阪出版書籍目録」によると、享和二年(一八〇二)二月の申出ということになっている。はたしてそれであるとすると、それと関連して注目すべき書に「大成(大全) 正字通」が浮かび上がって来る。これは、当時にあつて索引方法に新機軸を打ち出した字引であり、「急用問合即座引」等と共に、その推進者たる吉文字屋市兵衛が、天明から化政期にかけて、盛んに宣伝したものである。

「大成（大全）正字通」横本三ツ切一冊は、イロハ分けの見出し語を発音上の特徴から「すむ、にぐる、ひく、はねる」の四つに分類し、それと意義分類との二本立てによって求める語を検出できるように考案された、明和五年（一七六八）刊穂積義雄撰の「連城節用夜光珠」に始まる一連の字引の流れを汲むものであるが、これに天明二年（一七八二）版と享和二年（一八〇二）版の二種がある。この二版の分類方法の相違点については、既に山田忠雄氏の御指摘があるが（「語末辞書として見た『韻さぐり』」、例えば「にぐる」の分類基準として、天明版は語末に濁音があるかどうかで判定しているのに対し、享和版では語句の音節のいづれかに濁音があればすべて「にぐる」の部類に収める、という違いがある）。

さてこのB4本に付された吉文字屋市兵衛の広告を見て行くと、「大成（大全）正字通」は二ヶ所に互り各々解説付で出て来る。すなわち一は「大成正字通」の名で、第四冊前見返し「儒書曆書品目」中に見られるものであり、一は第十二冊の刊記のある丁の後に付された二丁分の広告のうち、二丁目をすべて費して「急用間合即座引全本大成正字通」

の名で詳しい内容案内を伴って出て来るものである。而してその後者の方を眺めてみると、「未^{いま}得^{きよらんず}御意^{ごい}」に註して「④ノ部ノニゴルニアリ」とあり、「出會^{いっかい}申^{まうし}れ」に対し「④ノ部ノスムニアリ」と説いている。実はこれは「大成正字通」天明版の特色を示しているのである。何となれば、享和版では「出會^{いっかい}」の方も音節の中に「で」という濁音を含むゆえ、「ニゴル」の中に分類されるからである。したがって、この「大成（大全）正字通」の広告があることを以て、B4本の発賣時期を享和まで引き下げるということは、一応不可能ということになる。ところが、この「大成正字通」の広告を見ると、非常に刷りが悪い。この種の広告は同じものが何種類もの何部もの本に付けられるから、刷りが甚しく劣る場合も多く生ずる。したがって、刷りが悪いからと言って、とやかく論うことは危険であるかもしれないが、筆者はこれを享和期以降のものと考えたい。つまり享和二年に「大成正字通」の改訂版が出た時に、天明版のための広告であったものを、そのまま流用したと見たのである。というのは、さらに見て行くと、同じ第十二冊の終丁の次、「大成正字通」の広告の前に、より後に刊

行された「月令博物筌」の広告があることに気付くからである。すなわち「此書編述シテヨリ凡三十年ノ間、儒者・佛者・和學者・職原家・哥人・誹人・天文者、其外諸先生ノ訂正ヲ歴テ、漸ク當年書ナル」とある本書は、文化元年（一八〇四）十二月から同五年（一八〇八）九月にかけて刊行された「改正月令博物筌」を指していると考えられるからである。

斯くして、このB4本の発賣時期は、文化年間の初め頃かと推定される。ところが、こゝに、やゝ不審な点がある。それは、後述するように（C2本解題参照）、安永九年版にも、ほど同様な吉文字屋市兵衛の広告が付されて發賣されている後印本が存するからである。安永九年（一七八〇）の後、「増續大廣益會玉篇大全」の新たな開板は、天保五年（一八三四）まで空くから、安永版に享和頃發刊の書物の広告を付けた後印本が存しても、何ら不思議ではないであろう。ところが、安永版の前身たる享保版に、それとほぼ同時期の刊行にかゝる書籍類の広告を付した後印本が存する。これはやゝ不思議である。表紙や見返しのみ付け代えたということも考えられるが、検するに原裝のまゝでそう

いう細工は無いように見受けられるのである。享保版の後には安永版が新版として出たということは、普通、享保版の版木が磨滅するか等して使用に耐えなくなったことを、したがって賣る側にとっては、現物が品切れになったということ、意味するはずである。この場合、両者の版元の大半が重さなり合っているので、余計そう考えてよいはずである。勿論、享保二十年（一七三五）から安永九年までも、かなり間が空くから、後印本があつてしかるべくである。事実享保版には、版面がひどく疲れて、字画や註文その他が読み得ぬ程刷りの悪くなつてしまつている後印本も存する。（本書も勿論刷りが悪い）。しかし、もしその後印本に広告を付すとすれば、安永九年版が出るまでの、元文と安永八、九年頃までの刊行にかゝるものを掲載するのが、普通なのではあるまいか。このB4本の場合、あるいは吉文字屋が、たまたま自分の手許に賣れ残つていた享保版に広告を付けて、文化頃に賣つたものなのであろうか。筆者蔵。

安永九年版

(C1) 浪華六書肆版

表紙 濃縹色地紙に雷菱（又は紗綾形）・唐草模様空押し。

題簽 B3本と同形式。

首巻前見返し 今までは本文共紙の白紙であったが、この安永版より著者名・大題・刊年等が記されることとなり、以後の版は大体これを踏襲する。

子持ち枠付。豎に子持ち枠で真中の部分がやゝ幅広くなるように三ツ割にし、中央に「會玉篇大全」と大きく出し、右の欄に「毛利貞齋先生著」の字と「千里必究／不許翻刻」の模刻印形を入れ、左の欄に「安永九年庚子再刻校正監本」の年記を入れる。

目次 首巻をのぞき各冊前見返しにあり。これも安永版から始まるものである。子持ち枠付。上部を子持ち枠で横に区切り、部首の画数を右横書きに大きく記す。下部は単線で十行三段に区切り、部首とその始まりの丁数を各々記す。丁数は「葉」で示す。

刊記 終丁才は享保版に同じ。終丁ウに

舊板再治享保廿年乙卯初冬

新校刊布安永九年庚子初冬

大野木市兵衛

松村 九兵衛

浅井徳右衛門

澁川與左衛門

澁川清右衛門

鳥飼 市兵衛

浪速書肆

とあり、その左脇に界線を置いて「初學指南抄」の広告を次の様に出す。

初學指南抄

全冊毛利貞齋著○朱引指南唐土歴代要覧廿一史大鑑經書詩文讀法指南ヲ委ク載經文出所ヲ記シ初學ノ為

ニナルヲヲ集ム

因に「享保大阪出版書籍目録」によれば「大廣益會玉篇大全」十二冊、板元吉文字屋市兵衛、出願安永九年四月、許可安永九年五月九日。

備考

享保版に基づき再刻したもの。巻五の冠解の出し方の不統一は、享保版とは多少異なるが（例えば七十一オ・ウ、七十二ウが○）やはりある。未刻の個所は一ヶ所に減っている。

所在

国立国会図書館新城文庫 岡山大学図書館池田文庫(一部)
金沢大学図書館(二部) 京都大学図書館 東京大学図書館

上田市立図書館藤廬文庫 神宮文庫 都立中央図書館 無
窮会図書館織田文庫 (首巻および巻七入れ本)

(C2) 吉文字屋市兵衛発賣本

刊記等 C1本に同じ。

備考 第四冊後見返し (「詩文書品」十三点) や第十冊後見返し

(「儒書曆書品目」十四点) 等、七ヶ所に互って、大坂心齋
橋南四丁目 定栄堂吉文字屋市兵衛の蔵版目録が付されて

いる。貞斎のものとしては「補正初學指南抄」が二ヶ所に
出て来るが、その他「大成正字通」をはじめB4本の広告
にあった書名と重さなるものが多く、広告の様式もそれに
似る。発行年月を推定する参考になるものとしては、前記
の「大成正字通」のほか、寛政十一年(一七九九)十一月
出願の「医療衆方規矩」、享和三年(一八〇三)二月許可の
「妙術博物笥」等があげられる。享和末年から文化初年頃
にかけての発賣本か。筆者蔵。

因に、貞斎のものとしては、宝永元年(一七〇四)五月刊
の「通俗戰國策」にも、「妙術博物笥」を含む享和末年頃
の定栄堂の広告が付されている本がある。また貝原損軒・

好古の「日本歳時記」や有賀長伯の「増補歌枕秋の寝覚」
にも、同様の広告が付されている後印本がある。

天保五年版

(D11) 十二冊本

題籤 B3本と同形式。

首巻前見返し 安永版と同形式。

子持ち枠付。真中が幅広くなるように豎に三ツ割にし、中
央に大きく「會玉篇大全」と書名を出し、右に「毛利貞齋
先生著」の著者名と「千里必究／不許翻刻」の模刻印、左
の欄に「天保五年甲午再刻校正監本」の年記等を記す。こ
れが前表紙と離れていて、扉紙のウラの如き位置にあるも
のがあるが、場所が変わっているだけで、版面は同じであ
る。

目次 安永版と同様にあり。但しこれも各冊前見返しではなく、
扉紙オモテや同ウラの位置に刷られている本がある。が、
位置が異なっているだけで、やはり同版である。

刊記 終冊終丁オは享保版と同形式。次丁ウに次の如くあり。

天保五歳甲午初春吉日

松村 九兵衛

同 清助

浪華書肆

和田治良兵衛

澁川清右衛門

柳原 喜兵衛

米田清右衛門

備考 卷五の冠解の出し方の乱れはこれにもある。安永版と異なる

るところは、これは巻五の七十三オ〜四ウが()となつてい

る点であり、七十一オ〜ウ・七十二ウは()で統一されてい

る。また未刻の部分はすべて無くなつてゐる。

所在 国立国会図書館亀田文庫 書陵部(二部) 東京教育大学図

書館 岡山大学図書館池田文庫 高野山大学図書館(光台

院寄託本) 神宮文庫(二部) 茨城県立図書館(首巻欠)

無窮会図書館平沼文庫

(D10) 薄葉刷本

半紙本三冊

表紙 淡金茶色布貼。

上巻扉オ D1イ本首巻前見返しに同じ。

目次 各巻の扉オの位置にあり。

刊記 D1イ本に同じ。

分巻 (上冊)首巻〜巻三〇三画下V (中冊)巻四〇四画V上〜巻

六〇六画V上 (下冊)巻六〇六画V下〜終巻八巻十V

備考 D1イ本と同版。

所在 東京大学国語研究室(題簽後補墨)

秋田藩明德館版

(E11) 十二冊本

表紙 濃縹色地紙に卍つなぎ空押し模様のものや、栗皮色地紙に

唐草・花紋空押し模様のもの、濃縹色地紙に紗綾形・唐草

模様空押しのもの等がある。

題簽 正のみあり脇題簽は無し。子持ち粹付短冊形白紙、表紙左

肩に貼付。上方に界線を置き、「四聲附韻／冠註補闕／類書

字義」と三行に分けて角書をし、下に「校正増續大廣益會

玉篇大全」と題簽題を記し、その下に「子」〜「亥」の十二

支による冊序表記、その左に「首巻」、「至一畫」〜「至十畫」

の収録部首の画数表示がある。

首巻前見返し 白紙。

目次

各冊扉オの位置にあり。安永版・天保版と同形式なれど、
両本に見られなかつた首巻にもある。すなわち子持ち枠内
の上部を子持ち界線で区切り、「首巻總目」と右横書きに
大きく出し、下方を罫線で豎十行に分け（はじめの六行分
は途中までしか罫が無い）、「凡例／引用書目／四聲附韻目
録／檢字」と四行に記し、その下約六行分を費して、「焮
田藩／明德館／臧版記」とある大型方形印を模刻する。

刊記

終巻終丁オの本文枠内五行目〜八行目、同ウの本文枠内一
〜八行目を、黒塗り様に刻してある。したがって終丁オは
本文末の「右至十七畫大尾」と最終行の「増續大廣益會玉
篇大全卷十 大尾」の尾題のみ存し、他の版にある「此書
首尾校正毛利齋之丞筆著」の字句が無い。

備考

本書は天保版に基づいての翻刻であろう。例えば巻五の冠
解の出し方も、天保版のそれと一致する。而してその刊行
時期は、天保五年〜九年（一八三四〜三八）の間、限定す
れば天保九年であろう。それは次のような理由による。

まず、首巻扉にその名に見える秋田藩藩校明德館は、はじ
め明道館と言った。寛政元年（一七八九）七月七日に、秋

田藩主佐竹家二十九代の義和公が学館創設を発表。同二年

二月竣工し、同五年明道館と称するようになったものであ
る。そして「明德館教授日記」（県立秋田図書館蔵 写本
一冊）文化八年十二月三日の条によれば、「御学館明道之
名被改置^{せ消}ひ而、今日明德与可奉称之旨被仰渡^{せ消}り」とあつて

文化八年（一八一）十二月三日以後、明德館と改称され
たことがわかる。（であるから、もし万一本書が天保版に
先立つものであると想定しても、この時点よりは遡り得な
いことになる。）また明治八年（一八七五）に、その佐竹
家の流れを汲む佐竹義脩が、本書を再版するにあたって官
許を願い出た時の書類の写しが、同図書館に蔵されている
（「本解題参照」）。それによると「其中誤謬ヲ校訂シ重刻出
板天保九年ヨリ所持罷在候處」云々とあつて、本書が天保
九年までの開板であることを知ることができる。版式等を
勘案するに、天保五年版は安永九年版に基づき翻印された
ものであり、明德館版はその天保五年版による翻刻である
と考えて不自然ではなからう。すると、本書は、天保
五年〜九年の間、さらに限定して天保九年の版行というこ
とになる。

所在 東北大学図書館狩野文庫 東京教育大学図書館 秋田県立

秋田図書館（四部 一は狩野文庫 一は岡文庫本）

(E10) 薄葉刷三冊本

大本三冊

表紙 暗金茶色布貼。

題簽 子持ち粹付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上部を界線で区

切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と角書し、下に

「校正増續大廣益會玉篇大全」と書名を出す。巻序や部首

の画数表示は無い。

目次・刊記等 E1イ本に同じ。

分巻 (上冊) 首巻～巻四上 (中冊) 巻四下～巻六上 (下冊)

巻六下～巻十

備考 刷り悪く字書として不適當な程に字画その他のはっきりし

ない個所がある。E1イ本と同版。

所在 都立中央図書館諸橋文庫

題簽 帙の中央にE1ロ本と同じものがある。

表紙 金茶色布貼のものや、濃暗紺色二重菱格子模様入り布貼り、香色無地紙のもの等がある。

目次・刊記等 E1イ本に同じ。

分巻 三種類ある。(第二冊) 首巻～巻三ハ三画下V又は首巻～巻

二ハ三画上V (第二冊) 巻四ハ四画V上～巻五ハ五画V又

は巻三ハ三画下V～巻四ハ四画V下、或は巻四ハ四画V上

下 (第三冊) 巻六ハ六画V上～巻七ハ七画V又は巻五ハ五

画V～巻六ハ六画V下 (第四冊) 巻八ハ八画V～巻十又

は巻七ハ七画V～巻十ハ十画至十七画V

備考 刷り悪く、字書としての用に立ち難い個所も多い。E1

イ、E1ロ本と同版。

所在 東京大学国語研究室

(F11) 十二冊本

無刊記本

表紙 海緑青色地紙に紺青色の小菊入り亀甲紋等を捺す。

題簽 E1イ本に同じ。

首巻前見返し 白紙。

(E11) 薄葉刷四冊本

大本四冊 濃縹色布貼帙入り

目次

首巻をのぞきE1本と同じ。首巻は、子持ち枠内の上部を子持ち界線で区切り、「首巻總目」と右横書きに大きく出し、その下方を罫線で十行三段に割り、「凡例／引用書目／四聲附韻目錄／檢字」と上段右タテ四行に記す。すなわちE1本に比して、三段に分けてある点と明德館の蔵版印が無い点で異なっている。

刊記

E1本と同じ。

備考

首巻扉オの目次をのぞき、明德館蔵版本と同一版本を使用している。刷りが明德館版より僅かに若い感じのする本もあるが、その先後および刊行事情は不明である。

所在

秋田県立秋田図書館（嘉永七年秋九月の書き入れあり）

(F10) 薄葉刷三冊本

半紙本三冊

表紙 金茶色布貼。

刊記・目次 F1イ本と同じ。

分巻 (上冊)首巻〜巻三〇三画下V (中冊)巻四八四画V上〜巻

六八六画V上 (下冊)巻六八六画V下〜巻十八自十画至十

七画V

備考 F1イ本と同版。

嘉永七年版

(G11) 大阪四書肆本

半紙本十二冊

表紙 濃黒渋茶色地紙に雷菱・唐草、又は縹色渋引き地紙に紗綾

形・唐草模様空押し。空色地紙に紗綾形・飛雲・圈竜紋空

押しものもあり。渋が引いてあるのは、保存強度を増す

ためであり、「増續大廣益會玉篇大全」の場合、嘉永版以

降のものに多く見られる様式である。

題簽 子持ち枠、角書欄乳付。享保版B3本、安永版、天保版と

同形式。

首巻扉オ 安永版、天保版前見返し等と同様式。子持ち枠付。子

持ち界線で中央の欄がやゝ幅広くなるように、豎に三ツに

区切り、中央に「會玉篇大全」と大きく書名を出し、右の

欄に「毛利貞齋先生著」の字句と「千里必究／不許翻刻」

の印形模刻、左の欄に「嘉永七年甲寅五刻校正監本」の年

記を記す。

目次 首巻をのぞき各冊扉オの位置にあり。安永版、天保版と同

型式。

刊記 終冊終丁才は享保版・安永版・天保版と同じ。終丁ウに

嘉永七歳甲寅初春吉日

松村 九兵衛

大阪書肆

同 清助

和田治良兵衛

柳原 喜兵衛

とあり。

備考

本書は天保五年版に基づいている。巻五の冠解の出し方も、天保版と同じである。秋田藩明德館蔵版本や無刊記の「校正増續大廣益會玉篇大全」から来ているもので無いことは、題簽題が異なること、天保版と同じ様に首巻には目次が無いこと、等から明らかであるが、例えば、元禄版以来安永版まで未刻の部分があった巻四上・四十三ウ一行目の「較」の反切を見ても、わかる。すなわち、

「較フシム也陳也亦作シ較ニ」
「較」は「陳」の誤り、
「亦」は「亦」の誤り。

という具合に未刻のままの部分があった反切の一部が、天保版に至って初めて「苦于切」と完全なものになったのであるが、本書もそれをそのまま受けついでいる。同じく天

保版に基づいて開板されているはずの明德館版・無刊記版

では、それが「芳于切」となっているのである。(因に、

寛永八年や寛文三年四月刊の付訓本「大廣益會玉篇」では

当該個所が本書と同じ「苦于切」とあり、寛文四年の「新

刊大廣益會玉篇(増修玉篇)」では「芳無切」となってい

る)。

なお「享保以後大阪出版書籍目録」によれば

會玉篇大全 十二冊 再板発行申出

板元 敦賀屋九兵衛

右板元よりの申出でを本屋行司にて聞届け板行

申出年月 嘉永六年十二月五日

とある。この四書肆の中では、松村九兵衛すなわち文海堂敦賀屋九兵衛が主導権を握っていたのであろう。

所在 国立国会図書館 京都大学図書館(菊亭家旧蔵) 高野山大

学図書館(正祐寺寄託本) 宮城県立図書館 蓬左文庫

(G10) 四書肆薄葉刷本

大本三冊

表紙 金茶布貼。

刊記等 G1イ本と同じ。

分卷 (上冊)首卷・卷一〇二画〱卷三〇三画下 (中冊)卷

四〇四画〱上〱卷五〇五画〱 (下冊)卷六〇六画〱上〱卷

十〇自十画至十七画〱

備考 G1イ本と同版。

所在 書陵部

(G2) 四書肆・敦賀屋九兵衛版

表紙 縹色地又は黒渋茶色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽 G1イ本と同じ。

首卷扉オ・目次 G1本と同じ。

刊記 終冊終丁ウにG1本と同じく大阪四書肆のものあり、後見

返し匡郭内に

京都寺町本能寺前

三都

江戸日本橋一丁目

同 浅艸茅町

同 芝神明前

錢 屋惣四郎

須原屋茂兵衛

須原屋伊 八

岡田屋嘉 七

發行

同 日本橋二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝神明前

和泉屋吉兵衛

同 横山町一丁目

出雲寺萬次郎

書房

大坂心齋橋南一丁目

敦賀屋九兵衛版

と八書肆名を連記する。すなわち四書肆版後印の敦賀屋

(松村)九兵衛版である。前引安政三年七月刊「新編増補字

林玉篇大全」卷末広告中の「増續會玉編大全」は、あるい

はこのG2本を指して言っているのであろうか。それとも

G1本のことか。

備考 刷りはG1本に比べて劣る。

所在 東京大学図書館南葵文庫

(G3イ) 大阪六書肆本

表紙 黒渋茶色地又は縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。紫青色

地紙に唐草模様空押しのものもあり。

題簽 G1イ本と同じ。但し刷り悪し。

首卷扉オ・目次 G1本と同じ。刷り悪し。

刊記 終巻終丁ウに

嘉永七歳甲寅初春日

山内五良兵衛

松村 九兵衛

大阪書肆

同 清助

梅村彦七

和田治良兵衛

柳 原喜兵衛

とあり。嘉永七歳云々の年記と「大阪書肆」の部分だけ残し、山内五良兵衛以下六名の書肆名を新たに入木したものか。

備考 刷りはG2本よりさらに劣り、字書としての利用に支障を来たしている本が多い。

所在 書陵部 岡山大学図書館池田文庫(二部) 蓬左文庫 水府

明徳会彰考館文庫(工部省旧蔵)

(G3口) 六書肆薄葉刷本

大本三冊

表紙 暗金茶色布貼。

首巻扉才・目次 G3イ本に同じ。

刊記 G3イ本に同じ。

分巻 (上冊)首巻・卷一八二画V、卷三八三画下V (中冊)卷

四八四画V上、卷六六六画V上 (下冊)卷六八六画V下、

卷十八自十画至十七画V

備考 G3イ本と同版。刷り悪し。

所在 秋田県立秋田図書館

(G4) 六書肆・象牙屋治郎兵衛版

表紙 渋引黒色地紙に雷菱・唐草模様空押し、又は纒色地紙に唐

草模様空押し。

題籤 G3イ本に同じ。刷り悪し。

首巻扉才・目次 G3本に同じ。刷り悪し。

刊記 終冊終丁ウにG3本と同じ嘉永七年の山内五良兵衛、柳原

喜兵衛の大阪六書肆のものがあり、後見返し匡郭内に

江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛

同 二丁目 山城屋佐兵衛

同 芝神明前 岡田屋嘉七

京御幸町御池南 菱屋孫兵衛

書房

大阪心齋橋南一丁目 敦賀屋九兵衛

同北久宝寺町

敦賀屋彦七

同堺筋金田町

象牙屋治郎兵衛

とある。象牙屋治郎兵衛はすなわち六書肆の中の終りから

二番目にある和田治良兵衛のことである。

備考 刷り悪く、字書として不適當な個所多し。

所在 慶応義塾図書館

(G5) 六書肆・河内屋喜兵衛版(イ)

表紙 黄色地紙に紗綾形模様空押し。

題簽 G3イ本に同じ。刷り悪し。

首巻前見返し・目次 G3本に同じ。刷り悪し。

刊記 終巻終丁ウにG3本と同じ嘉永七年六書肆のものがあ

(刷り極めて悪し)、後見返し匡郭内に

京都三条通御幸町

吉野屋 仁兵衛

江戸日本橋通南壺丁目

須原屋 茂兵衛

同 通二丁目

山城屋 佐兵衛

發行

同 芝神明前

岡田屋 嘉七

同 同 所

和泉屋 吉兵衛

同 兩國横山町三丁目

和泉屋 金右衛門

同 下谷池之端仲町

岡村屋 庄助

尾州名古屋本町通

永樂屋 東四郎

書肆

同 同 所

萬屋 東平

同 同 所

菱屋 藤兵衛

同 同 所

菱屋 平兵衛

大阪心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛板

と十三名の發行書肆を列記する。すなわち六書肆版後印の

河内屋喜兵衛板である。河内屋喜兵衛とは六書肆の中の一

番最後にある柳原喜兵衛のことである。

備考 刷り甚だ悪く、字書としての用をなさない。

所在 内閣文庫(外務省旧蔵)

(G6) 六書肆・河内屋喜兵衛版(ロ)

表紙 鶯綠色地紙に紗綾形空押し模様。

首巻前見返し・目次 G5本に同じ。

刊記 G5本と同じように、終巻終丁ウに嘉永七年六書肆のもの

があり、後見返し匡郭内に、京都吉野屋仁兵衛く大阪河内

央や、幅広の欄に「増會玉篇大全」と書名を出し、右欄に「毛利貞齋先生著」の編者名と、「千里必窮／不許翻刻」の篆刻印模刻、左の欄に「攝都書肆 五書堂合刻」の文字を記す。刷り悪し。

目次 G3・G7本に同じ。

刊記 G7本に同じ。

備考 刷り甚だ悪し。首巻前見返しにいう撰都の五書堂とは誰を指すか未詳。あるいは大阪六書肆のうち、松村九兵衛・同

清助を同系と見ての五書堂であろうか。

(G9) 六書肆・伊丹屋善兵衛版

半紙本十一冊(首巻欠)

表紙 黄色地紙に紗綾形模様空押し。

題籤 G3イ本と同じ。刷り甚だ悪し。

首巻前見返し 首巻を欠くため未詳。

目次 G3本に同じ。

刊記 終巻終丁ウにG3本と同じ嘉永七年大阪六書肆のものあり、後見返し匡郭内に

江戸日本橋通壹丁目

須原屋 茂兵衛

發行

同 淺草茅町二丁目 須原屋 伊八

同 日本橋通二丁目 山城屋 佐兵衛

同 両國横山町三丁目 和泉屋金右衛門

同 芝神明前 岡田屋 嘉七

京都三条通升屋町 出雲寺 文治郎

肥前佐賀白山町 紙屋 惣右衛門

書林

大坂南久實寺町 榎並屋 小兵衛

同心齋橋通備後町 近江屋 平助

同心齋橋通南久實寺町 伊丹屋 善兵衛

と十名の發行書林を掲げる。ともに刷りが悪い。

備考 刷りはG7本と同程度。

文久元年版

(H) 江戸大阪九書肆發賣本

半紙本十二冊

表紙 黒渋茶色地紙に紗綾形・唐草模様空押し。

題籤 嘉永版に同じ。刷り悪し。

首巻前見返し・目次 嘉永版に同じ。

刊記 終巻終丁ウにG3本と同じ嘉永七歳甲寅初春吉日 大阪書

肆 山内五良兵衛、柳原喜兵衛六名のもがあり、後見返し匡郭内に

文久元辛酉年細精改刻

江阪

須原屋 茂兵衛

山城屋 佐兵衛

岡田屋 嘉七

河内屋 喜兵衛

書肆

炭屋五郎兵衛

豊田屋卯左衛門

象牙屋治郎兵衛

發兌

敦賀屋 彦七

秋田屋 市兵衛

と記す。すなわち嘉永七年（一八五四）六書肆版の後印本の文久元年（一八六一）發賣本である。「江阪書肆」とあって個々の書賣の所在地を記していないが、この場合、はじめの須原屋・山城屋・岡田屋の三軒が江戸の書肆であり河内屋以下の六軒が大阪の書肆である。

備考

「文久元辛酉年細精改刻」として改刻本の如く装っているが、要するに嘉永版六書肆本の後印本の一種にしか過ぎない。

い。刷り悪し。

所在 天理図書館

明治五年版

(I11) 十二冊通行本

半紙本十二冊 大本もあり。

表紙 黒渋茶色地紙又は縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。縹色又は藍青色地紙に渋引き雷菱・唐草模様空押しのものや、暗小豆色地紙に紗綾形空押し模様のももある。

題籤 子持ち枠付、白紙。

(正) 短冊形紙、表紙左肩に貼付。上部を界線で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と三行に分けて角書を出し、下方に「増續大廣益會玉篇大全」の題籤題、その真下に小字で「子」〜「亥」までの十二支による冊序表記、その左横に「首巻」、「至一畫」〜「至十畫」の収載部首画数表示がある。

(脇)

矩形紙、正題籤の右脇、上方に寄せて貼付。上部を界線で区切り、首巻は「首巻總目」、他は「一二畫」〜「自十畫至十七畫」までの各冊収録部首の画数を右横

書きに記し、下方を豎十行三段（首巻は十行一段）に分つて、部首およびその始まりの丁数（首巻は「凡例」に「檢字」に至る内容標目のみ）を記す。丁付は「眞」で示されている。この点がこれまでのものと異なる点である。

首巻前見返し 扉オの位置にあるものもあり。子持ち粹付。上方欄外に「明治五壬申六刻」と右横書きに出す。粹内は複線で中央の欄が幅広くなるように豎に三ツに割り、中央に「増會玉篇大全」と太く大きく書名を出し、右欄上に寄せて「毛利貞齋先生著」と編者名を記し、左の欄に「浪華書肆合書堂藏梓」と大阪の書肆連の合版である旨を刻す。

目次 巻一以下各冊前見返し又は扉オの位置にあり。様式は安永版以下のものと同じ。丁付は同じく「葉」。

刊記 終巻六十一オは享保版・安永版・天保版・嘉永版に同じ。すなわち三行目に「右至十七畫大尾」とし、一行分置いて左に「此書首尾校正毛利香之丞（マツモトノシヅノ）筆著」と記し、四行分置いて左最終行に「増續大廣益會玉篇大全卷十 大尾」と刻す。六十一ウは四周単辺の匡郭内を野線で豎六行に分け、

元禄五壬申年御免刻成

享保二十乙卯再刻

安永九庚子三刻

天保六乙丑四刻

嘉永七甲寅五刻

明治三庚午八月六刻官許

とその板行経過を記す。さらに次に三周双辺の匡郭を有する一丁分を付加し、次の如く記す。

明治五年壬申夏四月六刻成

須原屋 茂兵衛

山城屋 佐兵衛

岡田屋 嘉七

三府

菱屋 孫兵衛

山内屋 五良助

象牙屋治郎兵衛

豊田屋卯左衛門

秋田屋 市兵衛

敦賀屋 彦七

發行

小島屋 伊兵衛

伊丹屋 善兵衛

河内屋 喜兵衛

河内屋 太助

河内屋 吉兵衛

書肆

河内屋 眞七

河内屋 勘助

近江屋 平助

敦賀屋 九兵衛

右の十八名の三府発行書肆は、最初の三名が東京、次の菱屋孫兵衛のみが京都、そして山内屋五良助以下十四名が大坂の書肆である。原本で菱屋の両脇が各々空いているのは、その三府の境界を示すためであり、その個所にあった書肆名を削ったりした跡では無いであろう。

備考

本書は巻五の冠解の出し方等から考えて、嘉永七年版に基づいての翻刻であろう。次の所在の項の旧蔵者名から見て、明治前期に於て、本書が実用的な単字字書として、官靡でも利用されたことを知ることができる。「享保大阪出版書籍目録」によると、板元は敦賀屋九兵衛外十一人、出願

は明治三年八月八日、同年十月九日に許可となっている。

なお本書には、首巻前見返しや終巻終丁後見返し等に、「大坂書林」と横に出し、界線を置いて下に「心齋橋通／博労町南へ入／河内屋勘助／製本発兌記」と四行に刻した矩形朱印の捺してある、河内屋勘助発賣本もある。

所在 書陵部(待医寮旧蔵) 内閣文庫(六部) (1)十一冊八卷三

欠V (2)外務省旧蔵 (3)太政官記録・履歴課旧蔵 (4)太政

官記録・財務課旧蔵 (5)太政官記録編輯課旧蔵 (6)合九

冊) 高野山大学図書館(二部) 天理図書館(河内屋勘

助發賣本 卷四下欠 十一冊) 東京教育大学図書館 神

宮文庫(二部)

(I10) 薄葉刷本

半紙本 三冊

表紙 香色布貼り。

首巻前見返し I11(十二冊本)に同じ。但し料紙に桃色染紙

と黄色染紙のものがあり、それを薄紙でくるんであるのが

原装。黄染紙の方が刷りが良いようである。

目次 卷一以下各巻扉才若しくはウの位置にあり。

刊記 I1イ本に全く同じ。

分巻 首巻前見返しが黄染紙のものは、(上冊)首巻・巻一八二二

画V<>巻三八三画下V (中冊)巻四八四画V上>巻六八六

画V上 (下冊)巻六八六画V下>巻十八自十画至十七画V

首巻前見返しが桃色染紙のものは、上冊と中冊の分巻状況

が異なる。すなわち、(上冊)首巻・巻一<巻四上 (中冊)

巻四下<巻六上となっている。

備考

I1イ本と同版。薄葉刷にした為、十二冊本で約十四・五

種あった全冊の厚みが、本書では約五種、大略三分の一に

つゞまっている。本書には、桃色染紙の首巻前見返し右欄

著作者名の下方等に、「大阪本町通/心齋橋東江入/河内

屋真七/製本發兌記」と刻した矩形朱印の捺してある、河

内屋真七發賣本もある。

所在 内閣文庫 (三部) (1)首巻前見返しが黄紙 法制局旧蔵 (2)

同桃染紙 (3)同 河内屋真七發賣本) 書陵部 (合一冊

(I2) 中川勸助版

表紙 縹色布目地紙に紗綾形模様空押し。

題簽・首巻前見返し I1イ本と同じ。

刊記 終巻六十一オ・ウおよび次の一丁はI1イ本と同じ。

その後さらにまた一丁半を付加し、左の如く、四周単辺の

匡郭内に計三十六名の「各地弘通書肆」を掲げる。

各

東京日本橋通一早目 北畠 茂兵衛

同 二早目 稲田 佐兵衛

同 三早目 長野 龜七

同 通油早 水野 慶次郎

西京花屋早油小路東 永田 調兵衛

伏見大阪早 前田 半兵衛

大和奈良東向北早 高橋 平三

泉州堺神明早 鈴木 久三郎

伊勢山田一志町 加藤 長平

名古屋京早 美濃屋代 助

同 七軒早 永樂屋吉三郎

江州彦根 小川 九平

美濃大垣 岡安 慶助

同岐阜靱屋早 水谷 善七

越前福井 帶屋 喜八

地

弘

加州大聖寺

深田屋伊三郎

越後柏崎新助早

高葉屋小平

播州 姫路

灰屋 輔二

備後 福山

笹屋 喜兵衛

安藝廣嶋堀川町

荒木 豊次郎

周防 山口

山城屋 臣吉

但馬 豊岡

桶屋 甚次郎

出雲松江天神町

川岡 清助

紀州 若山

野田 大二郎

東京芝神明前

山中 市兵衛

同 大傳馬早三丁目

東生 龜次郎

西京三條通御幸早

大谷 仁兵衛

同 二條通柳馬場

若林 喜助

名古屋本早通八丁目

片野 東四郎

同 四早目

矢野 藤兵衛

加州金沢上堤早

中村 喜平

同 保江早

近田 太平

石見濱田戎早

安達 幾太郎

豊前 中津

幸子屋壽平

泉州堺山口通熊野早 北村 佐兵衛
大坂心齋橋通博勞早 中川 勘 助版

すなわちI・Iイ本後印の中川勘助版である。

備考 刷りはやゝ劣り、字書としての用を果たし得ぬ程版面の磨

減している個所がある。

所在 慶応義塾大学国文学研究室

明治八年版

(J) 如不及齋佐竹義脩藏版本

半紙本十二冊

表紙 縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽 正のみあり、脇は無い。子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩

に貼付。E・Iイ本と同じ様式。

首巻前見返し 単枠内を豎に三ツ割にし、中央は上部に界線を置

いて「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と角書、その下に

「校正増續大廣益會玉篇大全」と書名を出す。右の欄は上

方に「毛利貞齋編述／秋田藩士校正」と二行に記し、左の

欄は「東京 如不及齋藏版(朱印)」とある。これにより本

書がE本・F本の流れを汲むものであることを知ることが

通

書

肆

できる。

首巻扉 オモテ匡郭内に

明治八年乙亥十月廿九日版權免許

校正増續大廣益會玉篇大全十二冊

東京第六大區八小區

中郷瓦町壹番地居住

佐竹義脩藏版

と記す。ウラは匡郭内下方右に寄せて「如不及／齋藏書／版之印」と篆刻した大型正方印を模したものがあつた。

目次 扉オの位置にあり。F1本ものを流用。首巻にもある。

刷り悪し。

刊記 E1本・F1本と同じ。すなわち終巻終丁オ本文欄五／八

行、同ウ一／八行目の部分が黒塗り状になっている。

備考 本書は、秋田藩明德館藏版本と同版の無刊記本「校正増續

大廣益會玉篇大全」(F1本)の版木を流用しつゝ、一部の丁をそれに基づいて改刻し、題簽と首巻前見返し・首巻扉を新たに付して、發賣したものである。したがって各巻、刷りの比較的良好い丁と相当に悪い丁とが、入り交じつてい

る。例えば、首巻で言うと、前見返しと扉が新刻、目次がF1本のもの、本文一オ／十八ウがF1本のかぶせ彫り、十九オ／二十二ウはF1本のもので刷り悪し、二十三オ／二十四(終丁)オがF1本のかぶせ彫り、という具合になっている。他の巻では、もっと目まぐるしく入りまじつてある場合がある。いずれにしても、やゝ安易な重刊態度である。

本書の藏版主佐竹義脩は、佐竹家三十二代(秋田十二代)義堯ヨシタカの実弟義謙ヨシノブの子で、幼名亀丸、のち次郎と称し、慶応元年(一八六五)五月以降義脩と名乗つた(「新編佐竹氏系図」・「佐竹次郎御名乗」)。そして慶応元年四月義堯の長女雅子マコトと婚し、明治五年(一八七二)一旦義堯の後を継ぐも、明治十四年(一八八一)廃嫡となつたと言ふ。したがつて秋田藩とは深いつながりを有し、その彼が、明德館本と首巻扉を除いて同版の「校正増續大廣益會玉篇大全」を主体として、重刻・再版を行なつたのも、不思議ではない。義脩は明治十一年(一八七八)にも、本書の再發賣を企てゝいるのである。現在、秋田県立秋田図書館に、このあたりの出版経過を示す「玉篇板権願」の写しが所藏され

ているので、次にその全文を紹介することとする。 竪二二
二、横七・五五種的美濃紙封筒入り、仮綴二丁。

三百三号

板権願

一、校正増續大廣益會玉篇大全 十二冊大

右者毛利貞齋著述出版、其中誤謬ヲ校訂シ重刻
出版、天保九年ヨリ所持罷在候處、文字漫漶ニ
付、明治二己年中再ヒ重刻出願、同年七月廿日
重刻免許、既ニ出版有之、一切條例ニ背キ候儀
無之候間、板権免許奉願候也

明治八年

東京府華族

亥九月十九日

從四位佐竹義脩^(黒)

明治八年九月

二十一年五月

東京府下第六大區八小區

中之郷瓦町壹番地居住

内務卿大久保利通殿

前書之通相違無之者也

明治八年 東京府知事大久保一翁^(朱)印
十月九日

印刷^(朱)
（以下朱書）

書面願之趣聞届候事

但免許状ハ追テ可相渡候事

明治八年十月廿九日 内務卿大久保利通印

封筒のオモテには

出版定例御布告ニ付、御藏版玉篇版權願、明治八年
十月九日東京府庶務課江進達、同年十月廿九日内務
卿ヨリ願濟御指令書写入、且同年十一月廿七日東京
府庶務課ヨリ板権免許書御渡相成、同月廿九日免許
料上納

同ウラには

板権免許願濟御指令本書

富岡英之助方ニ有

同料上納請取書右同断

免許証 御納戸江御仕舞

とあり。

所在 国立国会図書館（教育博物館旧蔵）書陵部（二部 一部は
学習院図書館旧蔵）

備考

本書は明治五年版に基づいての覆刻である。但し巻七の尾題が異なっている。すなわち元禄版以来ずっと巻七の尾題は、「七盡大成（三行置いて左に）増續大廣益會玉篇大全七盡終」という風にあったのであるが、その「七盡」の「盡」の部分を、「通り易く」「畫」と改めてある。

なお本書には、「浪華書賈」と右横書きに出し、界線を置いて下に「堺筋金田街／和田窓旭堂／象牙屋治郎兵衛／藏版發兌」と記した、子持ち杵付矩形朱印の捺してある、象牙屋和田治郎兵衛發賣本もある。

所在 国立国会図書館（二部 一は巻七欠十一冊本）

同 第一大區七小區唐物町 同上 森本 太助

同 第一大區七小區唐物町 同上 淺井 吉兵衛

同 第一大區八小區本町四丁目十二番地 同上 岡島 眞七

同 第一大區七小區博勞町 同上 中川 勘助

同 第一大區八小區備後町 同上 吉岡 平助

同 第二大區六小區心齊橋筋一丁目四十六番地 同上 松村 九兵衛

(K2) 中川勘助版

表紙 濃黒渋色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽・首巻前見返し等 K1本に同じ。但し刷りは劣る。

刊記 終巻終丁と次の一丁はK1本に同じ。本書ではその後、後

表紙見返し匡郭内に、次の如く十三名の諸國発行書肆名を

あげる。

諸 東京日本橋通一丁目 北畠茂兵衛

同 通二丁目 稲田佐兵衛

同 芝大神前 山中市兵衛

國 西京三條通堺町 出雲寺文次郎

同 名古屋本甲七丁目 片野東四郎

同 四丁目 矢田藤兵衛

發行 加州金澤保江甲 近田太平

同 上堤甲 中村喜平

書 播州姫路俵甲 伊藤和七郎

同 防州山口 宮川臣吉

同 雲州松江魚甲 大芦利七

同 豊前中津古博多町 梅津壽平

同 大阪心齋橋通博勞町四丁目 中川勘助

備考 刷り悪く、字書として役立て得ぬ個所がある。
所在 金沢市立図書館藤本文庫

(K3) 前川善兵衛発賣本

表紙 K2本に同じ。

題簽・首巻前見返し・目次 K1本に同じ。刷り悪し。

刊記 K1本に同じ。刷り悪し。

備考 終巻後見返し匡郭内に、藤沢南岳閣・寺倉梅太郎撰評の

「今古卅六名家文抄」全三冊の解説付き広告があり、末に
「大阪心齋橋筋南久寶寺町北／出版人 前川善兵衛」とあ
る。「今古卅六名家文抄」は明治十二年一月の刊であるか
ら、本書もおそらくその前後の発賣にかゝるものであるか
う。刷り悪く字書として不適當な個所あり。

明治十一年版

(L) 佐竹義術分版本

半紙本十二冊

表紙 濃黒渋地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽 明治五年版・十年版と同型式。

首巻前見返し 子持ち枠内を複線で中央が他に比べて幅広くなる

ように豎に三つに割り、中央に太く大きく「増會玉篇大全」

と書名を出し、右の欄上に寄せて「毛利貞齋編輯」、左の

欄下方に「佐竹氏發兌」と記す。

目次 F1本のを流用している明治八年版に同じ。

刊記 終巻終丁オ本文欄五〇八行目、同ウ一〇八行目が黒塗り状

になっている。これは秋田藩明德館本・F1本・明治八年

本と同じである。次に一丁分を新たに付加して、子持ち枠

内に次の如く記す。

明治八年十一月十七日版權免許
同十一年七月九日分版御届

編輯人 住所不詳 故人 毛利貞齋

原版主 第一大區二小區糸屋町 大阪府平民 山内五郎助

同 第一大區六小區博勞町 同上 和田治郎兵衛

同 二丁目五十四番地 同上 豊田宇左衛門

同 第二大區五小區長堀橋 同上 大野木市兵衛

同 筋上一丁目八番地 同上

同 第二大區六小區心齋橋 同上

同 筋一丁目七番地 同上

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
第一大區七小區南久宝寺町四丁目九番地	第一大區七小區南久宝寺町四丁目三十五番地	第一大區七小區北久太郎町四丁目十四番地	第一大區七小區唐物町四丁目十番地	第一大區七小區唐物町四丁目三十四番地	第一大區八小區本町四丁目十二番地	第一大區七小區博勞町四丁目十二番地	第二大區八小區備後町四丁目三十番地	第二大區六小區心齋橋筋一丁目四十六番地	同
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
兒島伊兵衛	前川善兵衛	柳原喜兵衛	森本太助	淺井吉兵衛	岡嶋眞七	中川勘助	吉岡平助	松村九兵衛	同

分版受主

東京府華族 從四位 佐竹義脩

第六大區八小區中ノ郷瓦町壹番地

發賣

第五大區八小區淺艸北 東京府平民 淺倉久兵衛
 東中町五番地
 第一大區七小區南傳馬 同 吉川半七
 町一丁目十二番地

このうち原版主十三名は、明治十年版の出版人と掲出順も全く同じである。たゞ吉岡平助の住所が、かれは「第一大區」とありこれは「第二大區」とある点が異なっている。分版受主佐竹義脩については明治八年版備考を参照のこと。

備考 本書は明治八年版の再刷本である。題簽と首巻前見返し、それに奥付を新しくしたとだけで、他はもとのまゝである。したがって刷りが相当に悪い。

所在 国立国会図書館 秋田県立秋田図書館

明治十三年版

(M1) 九書肆本

半紙本 十二冊

山田忠雄氏「漢和辞典の成立」付表(昭和34・12)に「大坂松村九兵衛↓竹中清助計9名」として紹介されているもの。未見。

(M2) 十三書肆本(イ)

半紙本 十二冊 鉛版

表紙 濃黒渋色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽 正は明治十年版と同じ様式。脇は飾り枠が付されている点

と、丁付がこれ迄の「葉」ではなく「頁」で示されている

ことが、異なる。

首巻前見返し 単枠内を複線で中央部分が幅広になるように豎に

三ツに割り、中央に「増續大廣益會玉篇大全」と書名を出し

右欄上方に「毛利貞齋編輯」、左の欄に「明治八年十一月

十七日版權免許」と記す。

内題 大体に於いて前版を継承しているが、次にあげる個所が異

なる。

(巻六下) 増續大廣益會玉篇大全卷第六下(マ)六畫 (巻八)

續増大廣益會玉篇大全卷第八八畫

尾題 (巻二) 十七頁八九オVにある「已上一畫部終」の表示が、

九行目から十行目に移っている。これは前の字の註が字數

を揃える都合上一字分九行目にずれこんで来ているため

ある。(巻四上) 八行目にある画數表示「四畫上異」の「異」

の字が「睽」になっている。(巻六上、巻九、巻十) 卷分け

に「巻第十」の如く「第」の字を入れる。また巻十の尾題

終行の前に界線を置く。(巻六下、巻七、巻八) これまで

刊記

「巻之六下」「七畫終」「巻之八」とあつた卷分けを、各々、「巻第六下」「巻第七終」「巻八」とする。他は明治十年版等と同じ。

終卷終丁オ(百二十一頁)はこれまでと同じ。ウは子持ち枠付匡郭内を界線で、始めの四行は豎二段、次は三行分豎一段に区切り

元祿五壬申年 享保廿乙卯年 再刻

安永九庚子年 三刻 天保六乙丑年 四刻

嘉永七甲寅年 五刻 明治三年八月 六刻

明治十年七月 七刻

明治八年十一月十七日版權免許

同 十三年八月廿三日再版御届

同 十三年十二月 八刻出版

と出版経緯を記す。次に単枠付の奥付を一丁半分付加し、編輯人の名と十三名の出版人、七名の發賣人を掲げる。

編輯人 住所不詳 故人 毛利貞齋

出版人 東區糸屋町一丁目 大坂府平良 山内五郎助

同 東區博勢町二丁目 同上 和田治郎兵衛

同 東區博勢町二丁目 同上 和田治郎兵衛

同	南區長堀橋筋上 壹丁目八番地	同上	豊田宇左衛門
同	南區心齋橋筋壹 丁目七番地	同上	大野木市兵衛
同	東區南久寶寺町 四丁目九番地	同上	兒島伊兵衛
同	東區南久寶寺町 四丁目三十五番地	同上	前川善兵衛
同	東區北久太郎町四 丁目十四番地	同上	柳原喜兵衛
同	東區唐物町四丁 目十番地	同上	森本太助
同	東區唐物町四丁 目三十四番地	同上	淺井吉兵衛
同	東區本町四丁目 十二番地	同上	岡島眞七
同	東區博勞町四丁 目十二番地	同上	中川勘助
同	東區備後町四丁 目三十番地	同上	吉岡平助
同	南區心齋橋筋壹 丁目四十六番地	同上	松村九兵衛
發賣人	南區心齋橋筋壹 丁目二番地		和田庄藏
同	東區北久寶寺町 四丁目		前川宗七
同	同 區 同 町		前川源七郎
同	同 區 同 町		中尾新助
同	東區南本町四丁目		金尾爲七

柱刻

十三名の出版人は、大区小区制が無くなって住居表示こそ違え、明治十年版のそれと掲出順も含めて同じである。
 なお、出版人・發賣人名の下方に、各々の屋号や姓名の朱印（検印）を捺してあるのが普通である。

三	凡例	子
一十	首巻	子
一	馬部 二畫	亥
二十二	骨部 十五之十九畫 高部 三畫	亥

等と出し、他は
 等と、上部に頁数を漢数字で右横書に出し、その下脇に部首と部首内に於ける標出字の画数、さらにその下に十二支による冊順表示を記す。部首表示では、例えば終冊四十頁「魚部」とあるべきところが「鬼部」となっているが如き

間違いもある。

頁付 目次には無し。(首巻) □、二〇四十七 (巻一) 一〇四

十、四一〇四二、四三三〇百三十 (巻二) □、二〇九十五

(巻三) 二〇九十二 (巻四上) 一〇百十一 (巻四下) 一〇百

七十二 (巻五) 一〇百五十一 (巻六上) 一〇百三十 (巻

六下) 一〇百十三 (巻七) 一〇百五十八 (巻八) 一〇七十

六 (巻九) 一〇五十四 (巻十) 一〇百廿一八末四頁分には

ナシ

頁数 各冊とも目次を除き計上。(首巻) 四十七頁 (巻一) 百三十

頁 (巻二) 九十四頁 (巻三) 九十二頁 (巻四上) 百十一頁

(巻四下) 百七十二頁 (巻五) 百五十一頁 (巻六上) 百三

十頁 (巻六下) 百十三頁 (巻七) 百五十八頁 (巻八) 七十

六頁 (巻九) 五十四頁八すなわち第十一冊目は合計百三十

頁 (巻十) 百二十一頁、他に奥付四頁

匡郭 四周子持ち棹付。大部分の丁はその中に本文部分の棹(有

界)を組む。豎十八・九五、横十三・四九纏。本文部分は

豎十四・八九、界幅一・三五纏。

目次 首巻(ナシ)、巻三上(第一頁)をのぞき扉オの如くであり。

前見返ししの位置にある本もあり。様式は明治十年版等と同

じて丁付も「葉」で示されているが、数え方は、巻一・三

・四下・五・六上・七・八九・十が頁数になっており、巻

二・四上・六下の三つが丁数になっている。

備考 おそらく明治十年版に依るものであろう。但し巻五の冠解

の出し方の乱れは無く、他巻と同じ(口)になっている。

一見活版の如く見えるが如何か。

所在 慶応義塾大学国文学研究室

(M3) 十三書肆本(口)

表紙 空色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽・首巻前見返し・目次等 M2本に同じ。

刊記 終巻終丁ウ、元祿五壬申年(同(明治)十三年十二月八刻

出版と、その出版年次が記されている部分の字体が、M2

本と異なる。その他は同じ。

備考 刷りはM2本より僅かに劣るか。

(M4) 十三書肆本(ハ)

表紙 青色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽 様式は同じであるが、正題簽がM2本と異なりM2本を真

似て新刻。

首巻前見返し・目次等 M2本に同じ。

刊記 M3本に同じ。

所在 慶応義塾大学国文学研究室

(M5) 十三書肆本(二)

表紙 空色地紙に渋引き、雷菱・唐草模様空押し。

題籤 正はM4本と同じ。脇は丁付「員」が丁数で無く頁数を示している点でこれ迄のものとは異なる。

首巻前見返し M2本に同じ。黄染紙のものもあり。

目次 M本4までは巻二・四上・六下の丁付が丁数を示していたのに対し、元の丁数の数字部分も生かしながら象嵌により頁数に直してある。

刊記 M3本と同じ。

備考 これまでは、本文が頁数で表示されているのに、脇題籤の部首が丁数で示されていたり、目次が巻により頁数表記のものと同数表記のものが入りまじっていたりして、不統一の感をまぬがれなかったが、本書よりすべて頁数に統一されたわけである。

(M6) 十三書肆補刻本

表紙 群青色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題籤 M5本に同じ。

首巻前見返し 桃紅色染紙。子持ち枠付。上欄外に「明治十三年

八刻」と右横書に出し、枠内を複線で中央の欄が幅広くなるように三ツ割。中央に「増會玉篇大全」と太く大きく書名を出し、右の欄に「毛利貞齋先生編輯」、左の欄に「浪華書肆合書堂藏梓」と記す。明治十年版に基づく新刻。

目次 M5本に同じ。

刊記 終巻終丁オ(百二十一頁)以下すべて新組み。終丁ウはM2とM5本と同じ様式なれど、「元祿五壬申年 初刻」と「初刻」の字が入り、「天保六乙未年 四刻」と天保六年の干支が正しく改められている点で、異なる。末に付加された子持ち枠付の一分には、編輯人の名と、十三名の出版人、五名の発賣人を列記してあるが、M2とM5本と比べ、出版人のうち三名が代っており、発賣人は七名から五名に減り、共通するのは金尾と森本の二名になっている。

編輯人 住所不詳

故人
毛利貞齋

同	東區糸屋町一丁目 二十番地	大阪府平良 山内五郎助
同	東區北久寶寺町 四丁目	同上 前川源七郎
同	南區長堀橋筋上 一丁目八番地	同上 豊田宇左衛門
同	東區本町四丁目	同上 中尾新助
同	東區南久寶寺町 四丁目九番地	同上 兒島伊兵衛
同	東區南久寶寺町 四丁目三十五番地	同上 前川善兵衛
同	東區北久太郎町 四丁目十四番地	同上 柳原喜兵衛
同	東區唐物町四丁目 十番地	同上 森本太助
同	東區北久太郎町 四丁目八番地	同上 辻本信太郎
同	東區本町四丁目 十二番地	同上 岡島眞七
同	東區博勞町四丁目 十二番地	同上 中川勘助
同	東區備後町四丁目 三十番地	同上 吉岡平助
同	南區心齊橋筋一 丁目四十六番地	同上 松村九兵衛
發賣人	東區唐物町四丁目	竹中清助
同	同 博勞町四丁目	野村長兵衛
同	東區南本町四丁目	金尾爲七

同

南區心齊橋筋一
丁目

森本專助

同

同 安土町四丁目

華井卯助

備考

卷五終丁オ(百五十一頁)、卷六下終丁オ(百十三頁)は、M

2~M5本と様式同じなれど、全面新しく組みかえている。

明治十五年二月辻本信太郎刊山崎昇編「鼈頭韻學圓機活法」

の末に「尚書堂辻本信太郎新刊書目」の付されているもの

があるが、それに「洛澄毛利貞齋先生著述

全十二冊鉛版
代價金三圓」と

あるのは、本書のことであらう。

所在

東京大学図書館蔵外文庫(小倉京町壹丁目 書肆 三浦春

日堂の貼り札あり。殆ど使用の跡は認められない。)

明治十六年版

(N1) 十二書肆本(イ)

小本銅版薄葉刷六冊 濃紺布貼帙入り

表紙 水色無地紙 豎十三・九三、横九・四一程。

題簽

(帙) 単梓付短冊形裏色布、左肩に貼付。「増續大廣益會玉篇

大全 完」

(正) 子持ち粹付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上方を二重線

で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と角書。下

方に「増續大廣益會玉篇大全」の書名、その右下に「子

丑」に「戌亥」に至る冊順表記、左下に「首巻」「三畫上」

「四畫上」「五畫上」「六畫下」「自八畫」とその収録部首

の画数を記す。

(協) 蔓草模様飾り粹付矩形紙。「首巻總目子」「一二畫丑」

などと画数表示等は豎一段に記し、各々の部首およびそ

の始まりの丁数を「葉」で四段ないし五段に示す。

第一冊扉

(オ) 赤刷の飾粹付。中央部分が多少幅広くなるように、赤の

界線で豎に三ツに割り、中央に「増大廣益會玉編大全」

と書名を出し、右欄上方に寄せて「日本毛利貞齋篇輯」

左欄中央に「大坂同盟書堂梓(同盟)(朱印)」と、篆書体黒字で

記す。

(ウ) 同じく赤刷飾り粹付。その内側中央に更に赤刷飾り粹を

作って、その外側上方に「大日本」、下方に「大阪銅鑄」

と右横書に出し、内側の飾り粹内に「明治八年十一月十

七日／版權免許明治十六／年三月第九版發行」と黒字篆

書体で記す。

尾題

(巻六下)六畫下至於此爨(四行分置いて次に)増續大廣益

會玉篇大全卷之六下終(巻八)八畫大成(二行置いて

次に)増續大廣益會玉篇大全卷之八終(巻九)増續大廣

益會玉篇大全卷九終(次に来る「九畫大成」の四字が無

い)(巻十)(51オ3行目)已上十二畫終他は明治五年版

刊記 卷十終丁(61)オは明治五年版、十年版、十三年版等に同

じ。同ウは

元祿五壬申年 享保廿乙卯年 再刻

安永九庚子年 三刻 天保六乙丑年 四刻

嘉永七甲寅年 五刻 明治三年八月 六刻

明治十年七月 七刻 明治十三年八月 八刻

明治八年十一月十七日 版權免許

同 十六年三月廿六日別製本御届

とその出版経緯を記す。この様式は明治十三年版M2とM5本と似る。左下余白に「定價貳圓五拾錢」の朱印を捺してある場合が多い。次に奥付二丁分(但し二ウは空白)を付し、編輯人毛利貞齋の名と、十二名の出版人、七名の発

賣人を掲げる。

編輯人	住所不詳	故人	毛利貞齋
出版人	東區糸屋學 一丁目十四番地	大坂府平民	山内五郎助
同	南區心齊橋筋 老丁目四十三番地	同上	松村九兵衛
同	南區長堀橋筋 上壹丁目八番地	同上	豊田宇左衛門
同	南區心齊橋筋 老丁目七番地	同上	大野木市兵衛
同	東區南久寶寺町 四丁目四十九番地	同上	兒島伊兵衛
同	東區南久寶寺町 四丁目八番地	同上	前川善兵衛
同	東區北久太郎町 四丁目十五番地	同上	柳原喜兵衛
同	東區唐物町四丁目三十八番地	同上	森本太助
同	東區唐物町四丁目十番地	同上	淺井吉兵衛
同	東區本町四丁目五十九番地	同上	岡島眞七
同	東區博勞町四丁目四十三番地	同上	中川勘助
同	東區備後町四丁目三十七番地	同上	吉岡平助
發賣人	南區心齊橋筋 老丁目二番地		和田庄藏

同	東區北久寶寺町 四丁目三十八番地	前川宗七
同	同區同町 三十九番地	前川源七郎
同	東區本町四丁目 五十六番地	中尾新助
同	東區南本町四 丁目十番地	金尾爲七
同	南區心齊橋筋 老丁目一番地	森本專助
同		北村宋助

目次
首卷(ナシ)・卷二(一才)を除き各卷扉オの位置にあり。
三重梓付。様式は明治五年、十年、十三年版等通行のものに似る。但し、卷二をのぞき各目次右下欄外に小さい梓組を作り、「申之部」(卷六下)、「西之部」(卷七)等と、原本の冊順を示す。丁数は「葉」で示されているが、卷二のみ「頁」とある。また部首および丁数は豎十行三段に記されているが、卷六下は一段である。

柱刻	増續會玉篇	凡例	一	同盟書房
	増續會玉篇	口十一ノ十九 土一ノ三	卷三上	廿二 同盟書房

の如し。すなわち上部に柱題を出し、その下に部首と標出

字の画数を小書にし、魚尾黒をはさんで下方に巻分けと丁数、さらに界線を置いて「同盟書房」と記す形式のものが多い。

丁付 大略明治十一年版までのものに同じであるが、初めの丁の「乙」を「一」に直している巻が多い。巻二・四下・七・九をのぞき皆「一」で始まる。

匡郭 三周子持ち枠。内側に本文用枠(有界)あり。竪十一・五五、横七・三櫃。本文枠は竪九・一一櫃。

分巻 (第一冊)首巻・巻一 (第二冊)巻二・巻三 (第三冊)巻四上・下 (第四冊)巻五・巻六上 (第五冊)巻六下・巻七 (第六冊)巻八・巻十

備考 明治五年版を基にし、十三年版等の一部参考にしたものか。巻七の尾題の画数は二ヶ所とも「七盡」になっており明治五年版に逆戻りしている。これまでの諸本に見られた巻五の冠解の標出字の上にある記号の乱れは、本書独自の形ではあるが、やはり見られる。なお第一冊凡例一才綴目側下方に「大阪中ノ島 伊藤聴泉堂銅刻」、第六冊奥付一才同個所に「大阪聴泉堂銅刻」と記す。

所在 国立国会図書館(二部 一は合三冊)内閣文庫

(N2) 十二書肆本(口)

表紙・題簽 N1本に同じ。

首巻扉 N1本のかぶせ彫りか。

刊記 次の一ヶ所をのぞき他はN1本に同じ。すなわち奥付一ウ三番目にある浅井吉兵衛の代わりに「同 東寛北久太郎町 四丁目九番地 辻本信太郎」が入っている。同一ウにある他の五名の出版人の名前より、高さがやゝ下がっているのも、こゝのみ後から入れ替えたものと考えられる。

備考 出版人が一名入れ代っているだけで、他はN1本に同じである。

(N3イ) 十五書肆・三発賣人本

小本 銅版薄葉刷 三冊

表紙 藍紺色布貼。

題簽 白絹布貼。様式はN1本に大略同じ。正は原冊順表示が「子丑」〜「申酉」と各冊四つ宛になっており、収載部首の画数表示は「首巻マ、ン」(自四畫上)「自六畫下」(自六畫下)「至三畫下」(至三畫下)「至六畫上」(至六畫上)「至七畫」(至七畫)となっている。また脇題簽の部首・丁数表示は、五乃至七段に行なわれている。

刊記 N2本の刊記にある出版人のうち、大野木市兵衛の代わり

に「東區南本町四丁目(マ)ノ十番地 金尾爲七」が入っており、十二人目の吉

岡平助の後に「同 南區心齋橋筋同上 老町目二番地 和田庄藏 / 同 東區北久宝寺四丁目三十九番地

町目 同上 前川源七郎 / 同 東區本町四丁目五十四番地 同上 中尾新助」の三名

が加わっている。この四名は、N1・N2本の七名の発賣

人のうちから出版人へ変わったものであり、したがって発

賣人はその残り前川宗七・森本專助・北村宋助の三名となっ

ている。新しく出版人となった四名については右に掲げた

部分が、また發賣人は住所・身分等を含めたその全てが、

分巻 (第一冊) 首巻・巻一〜巻三 (第二冊) 卷四上〜卷六上

(第三冊) 卷六下〜卷十

備考 三冊本にし、表紙・題簽を変え、奥付の一部を手直しして

いるが、本体はN2本と同版である。

所在 無窮会図書館

(N3口) 十五書肆・三發賣人・尚書堂本

表紙その他 N3イ本に同じ。

刊記 N3イ本に同じ。但し本文終丁と奥付との間に「尚書堂新

刊藏版書目録」が三丁分挿入されている。すなわち尚書堂
辻本信太郎の發賣本である。

備考 前引の明治十五年二月辻本信太郎刊 山崎昇編「齋頭韻學

圓機活法」の末に付された「尚書堂辻本信太郎新刊書目」

に、

洛遊 毛利貞齊先生編 巾箱精英形 / ○四聲附韻冠注 補闕類書字義

増續大廣益會玉篇大薄葉摺絹表紙鉄入 定價二圓五十錢

該書ハ玉篇之魁タルハ江湖君子知了セラル、トコロ

ニシテ、既ニ再版第八版ニ及ビ、十萬部以上ヲ印刷

セリ、之レ大廣益タル所以ナリ、然シテ從來ノ書ハ

大本ナルヲ以テ提携繙閱ニ便ナラス、依之巾箱精英

形ニナシ、精密之銅版ニ縮刻シ、良工ヲ撰ヒタレ

ハ、細字ニシテ鮮明ナリ、加之提携繙閱ニ極メテ便

ナリ、實ニ無雙寶益之良書也

とあるは、本書もしくはN2本あたりを指すか。

(N4) 十五書肆・四發賣人本

表紙・題簽 N3本に同じ。

刊記 N3イ本の刊記にある三發賣人名の後に、もう一人「同

東區北久寶寺町 同上
三丁目甲第卅四番所有地

花本安次郎が新しく加わり、計四名になつてゐる。この一名分のみが新刻補入であり、他は

N3イ本のまゝである。

備考 首巻扉など、多少刷りが落ちて来ている。

所在 東京教育大学国語学研究室

(N5) 九書肆本

首巻扉 N1~N4本に基づいて新刻。赤刷飾り枠の外側が手持

ち枠、内側が二重枠、界線が重線になつてゐる点と、枠ばかりではなく書名その他の記されてゐる文字も全て赤刷になつてゐる点と、他と異なる。

目次等 N1~N4本に同じ。

刊記 下巻本文終丁ウにある元禄五壬申年(明治)十六年三

月廿六日別製本御届までの経緯は、N1本以下に同じ(刷り悪し)。奥付はこれまでのものに代えて、一丁分を新刻してゐる。編輯人毛利貞齋の名と出版人九名を記すのみで、発賣人は居ない。

編輯人 住所不詳

出版人

南區心齋橋筋
一丁目四十三番地

故人 毛利貞齋
大阪府平民
松村九兵衛

同 南區長堀橋筋 同上

同 東區博勞町四丁目四十三番地 同上

同 東區南久宝寺町四丁目三十六番邸 同上

同 東區南久宝寺町四丁目八番地 同上

同 東區南本町四丁目十番地 同上

同 東區本町四丁目五十九番地 同上

同 東區備後町四丁目卅七番地 同上

同 東區唐物町四丁目三番屋敷 同上

同 竹中清助

所在 国立国会図書館亀田文庫(首巻扉欠)

明治三十八年版

(O) 郁文舎・文海堂本

洋装本 石版小本一冊

表紙 茶色クロス装。淡紅色、淡青色等のものもあり。堅十五。

五糧。

背文字 上寄りに黒で飾り枠を捺し、その中に「増會玉篇大全」

と金文字、そのすぐ下枠外に「東京郁文舎發行」と右横書きに金文字を捺す。下方には花紋あり、背の天地に各々金の二重線を捺す。

扉才 深黒綠色刷り。子持ち枠付。中央がやゝ幅広くなるように界線で豎に三ツ割。中央に「増會玉篇大全」と書名を凸版で出し、右欄上に寄せて「毛利貞齋著」、左の欄に「東京郁文舎發行」と活版で組む。

内題 通行本に同じ。

尾題 明治十年版に同じ。卷七の画数は「七畫」と正しく表記されている。

刊記 終巻最終頁は通行本に同じ。次に奥付一頁分を付加し、活版で組む。単枠付。

明治三十八年九月十日九版印刷
明治三十八年九月十五日九版發行

増續會玉篇大全
定價壹圓五拾錢

著者 故毛 利 貞 齋

東京市京橋區柳町五番地

發行兼 櫻 井 庄 吉

印刷者 大阪市南區心齋橋筋一丁目六十七番屋敷

發行者 松 村 九 兵 衛

版 權
免 許

〔行印部刷印會文都〕

發 行 所
東京市京橋區柳町五番地 郁 文 舎
大坂市南區心齋橋筋一丁目 松村文海堂

右の検印の個所に「郁文／舎發／行印」の正方印を捺す。各巻の前には無く、前見返しに別刷の「會玉篇大全總目」を貼付し、画数順に部首とその始まりの頁数を並べ、二十

六行九段に記す。単枠付、青刷。

柱刻 各頁上方に○を置いてその下に部首とその部首内の該当画数、下方に頁数を漢数字で記す。例えば

○凡例 一
○口部 十畫—十九畫 百七十二

○戈部 三畫—十三畫 ○弓部 一畫—二畫 三百

の如し。この部分は活版で組んである。校正をしっかりとしなかつた為か、部首や頁数がひっくり返っていたり、飛んでいたりの誤植がある。

頁付 首巻は独立。他は通し。(首巻)一—四十七 (卷二)一—百

三十 (卷三)二百三十一—二百二十四 (卷三)二百二十五—

三百十六 (卷四上)三百十七—四百二十七 (卷四下)四百

二十八—五百九十九 (卷五)六百—七百二、六百三、七百

四—七百五十 (卷六上)七百五十一—八百八十 (卷六

下) 八百八十一〜九百七、九百六、九百九〜九百九十三

(巻七) 九百九十四〜千五百十一 (巻八) 千五百十二〜千二

百二十七 (巻九) 千二百二十八〜千二百八十一 (巻十) 千

二百八十二〜千四百二

頁数 (首巻) 四十七 (巻一〜巻十) 千四百二

匡郭 四周单边。内側に本文用の枠が大部分の頁にあり。巻一〜

巻十は、各頁上欄外に匡郭の一部を利用して横長の矩形を

作り、「入部五畫」、「土部一一三畫」、「戈部十二一十八畫

戸部一二畫」等の如く、部首およびその頁に収載されてい

る標出字の部首内に於ける該当画数を右横書に記す。柱と

ちがってこの部分も石版である。豎十二・六六、横八・九

八種。本文枠は豎九・八五種。

備考 巻五の冠解の出し方の乱れは、明治五年版や十年版と同じ

くあり。巻七の尾題から考えて、おそらく明治十年版に基

づいての翻印であろう。

所在 国立国会図書館をはじめ諸所に多し。

明治四十二年版

(P) 千葉久栄堂版

小本石版薄紙刷三冊 紺色布貼帙入り

表紙 金茶色布貼 豎十三・六、横九・八五種。

題簽 協題簽は無い。

(帙) 单枠付短冊形白紙、左肩に貼付。「増續大廣益會玉編大

全完

(正) 子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。角書「四聲附

韻／冠註補闕／類書字義」。書名「増續大廣益會玉篇大

全」。その下に「上二畫」(四五畫) (四畫七畫) と巻分

けおよび収載部首の画数を記す。六画は二冊にまたがっ

て収録されているが、上・下の区別を示していない。

上巻前見返し 緋色地紙に青色刷。

双線で子持ち枠内を、中央が幅広くなるように豎に三ツ

割。真中の欄に「増大廣益會玉編大全」の書名を出し、右

に「毛利貞齋著」と上方に寄せて記し、左に「大阪 千葉

久栄堂發行」と記す。

内題 明治十六年版と比べ、次の巻が一部異なる。(巻三) 増續大

廣益會玉篇大全卷第三 三畫 (巻四下) 増續大廣益會玉

篇大全卷第四 四畫 (巻六上) 増續大廣益會玉篇大全

篇大全卷第四 四畫 (巻六上) 増續大廣益會玉篇大全

巻第六 六畫 「第六」の字の右下に「上」とあった

のを消した跡がある。(巻六下)増續大廣益會玉篇大全巻六下六畫」この「下」の字は削ろうとした形跡がある。

尾題

次の巻が明治十六年版と異なる。(巻二)増續大廣益會玉篇大全 三畫 「三畫」の下方にあった「上」の字を削つ

ているが、かすかに残存している。(巻三)卷之三三畫終

これも「三畫」の字の下方にあった「下」の字を削つて

いるが、かすかに残存している。(巻四上)四畫上裏」(一

行置いて)増續大廣益會玉篇大全巻第四 四畫」(巻四

下)已上四畫」(一行置いて)増續大廣益會玉篇大全巻第

四」(巻六上)已上六畫上裏/増續大廣益會玉篇大全巻

六」(巻六下)六畫下至於此裏」(四行分置いて)増續大

廣益會玉篇大全巻之六 終」巻七の画数は「七畫」とな

っている。

刊記 終巻本文最終頁(終丁オ)は通行本と同じ。後見返しに子持ち枠付の奥付を付して次の如く記す。

明治四十二年九月十五日訂正石版印刷

明治四十二年九月十九日訂正石版發行

不許複製

著作者 故人毛 利 貞 齋

發行者 大阪市東區北久寶寺町四丁目八番地 千葉 德 松

印刷者 大阪市東區北久寶寺町一丁目五十九番邸 園 田 藤 三 郎

發行所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋東江入 久 榮 堂 書 店

東京市京橋區中橋通廣小路 文 榮 閣 書 店

賣捌所

東京市神田區多町一丁目 精 華 堂 書 店

賣捌所

京都市上京區三條通寺町西江入 山 中 崑 松 堂

賣捌所

目次 首卷の凡例の後、五頁〜六頁途中にかけて「増續大廣益會玉篇總目次」として、画数別に部首および頁数を九段に記す。また巻一〜巻十にある各巻別の目次は、概ね各巻始めに、子持ち枠付有界十〜十二行三段で在り、部首の頁数は通して「葉」や「頁」「頁」等の字を伴なわない漢数字のみで示されている。巻三・巻四・巻六の各上下の目次は、

目次

首卷の凡例の後、五頁〜六頁途中にかけて「増續大廣益會玉篇總目次」として、画数別に部首および頁数を九段に記す。また巻一〜巻十にある各巻別の目次は、概ね各巻始めに、子持ち枠付有界十〜十二行三段で在り、部首の頁数は通して「葉」や「頁」「頁」等の字を伴なわない漢数字のみで示されている。巻三・巻四・巻六の各上下の目次は、

目次

首卷の凡例の後、五頁〜六頁途中にかけて「増續大廣益會玉篇總目次」として、画数別に部首および頁数を九段に記す。また巻一〜巻十にある各巻別の目次は、概ね各巻始めに、子持ち枠付有界十〜十二行三段で在り、部首の頁数は通して「葉」や「頁」「頁」等の字を伴なわない漢数字のみで示されている。巻三・巻四・巻六の各上下の目次は、

目次

各々合わせて一緒にし、各々の上巻の始めに記されている。また巻五のものは巻四の目次のウラに、巻十は巻八九の目次のウラに、各々位置する。

柱刻

明治十六年版のものを手直しして使っている。すなわち柱のオ・ウの両方に頁付をし、また巻三・四・六にあった上・下の別を削っている。但し巻二―二〇五・六頁には「巻三上」とはっきり見え、巻四上―三三五・六も「巻四上」と「上」の字がかなりはっきりしており、その他数ヶ所に亙って「上」あるいは「下」の字の痕跡をかすかに留めている箇所がある。

頁付

首巻は独立四十五頁。他は通し。間違いや明治十六年版の丁付の削りのこしもある。目次共。(巻二)一―百三十八目次には首巻よりの通し頁「四十六」が付いている。また九頁と十頁の頁付が入れ違っている。√(巻二)百三十一―二百二十六八但し最終頁は匡郭のみ。なお、本来巻二の冒頭であるべき内題を有する頁が、百三十五・百三十六と頁数をつけられた為、次にまわってしまい、もともとその次であるべき頁が百三十三・百三十四として逆に前に来ている。√(巻三)二百二十七―三百十八(巻四上)三百十九

〳四百三十二八最終頁匡郭のみ√(巻四下)四百三十三〳

六百四(巻五)六百五〳七百五十五(巻六上)七百五十六

〳八百八十六(巻六下)八百八十七〳九百九十九(巻七)

千〳千五百五十八(巻八)目次二頁分と千五百五十九〳千二百

三十四(巻九)千二百三十五〳千二百八十八(巻十)千

二百八十九〳千四百十八最終頁は匡郭のみ√

頁数

目次共。(首巻)四十五(巻一〳巻十)千四百十三

分巻

(上冊)首巻・巻一〳巻三(中冊)巻四上〳巻六上(下冊)

巻六下〳巻十

匡郭

明治十六年版に同じ。豎十一・四、横七・三五纏。本文粹は豎七・三五纏。

備考

首巻凡例一頁(一オ)匡郭外右下に「大阪中ノ島 伊藤聰 泉堂銅刻」と記す。これは明治十六年版のものである。凡例の後に總目次が入っている代りに、引用書目が無い。またそれに續く「四聲附韻字總目錄」は新しく版をおこしている。奥付に「訂正石版」とあれど、右に見た如く大部分は明治十六年版をそのまま流用しただけで、手直した箇所は総目次・目次・四声附韻總目錄それに柱刻の一部など、極少ない。巻五の冠解の出し方も明治十六年版に一致

する。

所在 国立国会図書館亀田文庫

明治四十四年版

(Q) 千葉久栄堂版

小本石版薄紙刷三冊 紺布貼帙入り

表紙 緑味を帯びた金茶色布貼。

題籤 明治四十二年版に同じ。

上巻前見返し 桃色地紙に黒刷。様式は明治四十二年版に同じ。

内題・尾題その他 明治四十二年版に同じ。

刊記 明治四十二年版のものを流用。ただし刊年の一部を「明治

四十四年十月一日訂正石版印刷／明治四十四年十月五日訂

正石版發行」と直し、その下に小さく矩形枠を組んで「正

價金壹圓參拾錢」と値段を記したところが異なる。

備考 明治四十二年版の後刷り本である。但し前版にあった巻一

や巻二の頁付の錯誤は訂正されている。